

梅 ヶ 崎 古 墳 群

第3節 梅ヶ崎古墳群

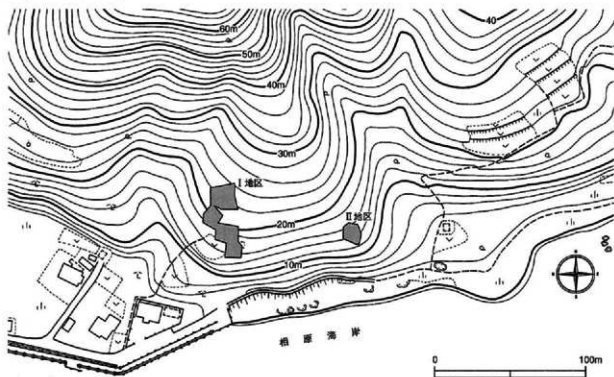
梅ヶ崎古墳群は、山口県のほぼ中央を南西方向に流れる全長30.3kmの樫野川の河口に近い、山口市大字江崎の相原地区に位置する。調査した5基の古墳のうち4基は、標高99mの相原山から南へ派生して延びる尾根筋の1つ、標高16~25mの南西向きの緩斜面に標高差3mごとに築造されている。残る1基は約80m離れた同一丘陵の東端の、現在は流水などにより自然浸食されて削られた細い谷筋に築かれている。

古墳からの眺望は南に開け、正面には周防大橋と周防灘に続く穏やかな山口湾が一望できる。周防灘から海上ルートで山口湾内に入っていくと、まず右手に幸崎海岸、左手に藤尾山が見えてくる。さらに進んでいくと平成3年度に完成した全長1040mの巨大な周防大橋が横たわり、その下をくぐり抜けると、真正面に相原山と、その丘陵の緩斜面に並んで築造されている梅ヶ崎古墳群が目に入ってくる。最も低い位置にある古墳から海岸線までの直線距離は約50mと近く、古墳群の立地には海との関連を考えざるをえない。

古墳が築造されている緩斜面は、最近まで段々畑として利用されていた。開墾時にほとんどの古墳の墳丘が削平を受け、石室の石材も一部抜き取られて本来の旧状をとどめたものは認められない状況であった。

調査を行った5基の古墳のうち3基の墳丘形状は円形を呈し、直径9~10mと推定され、内部主体は単室の横穴式石室であった。残る2基については遺存状況が極めて悪く、かなりの規模で削平並びに浸食を受けており、確認できなかった。

調査区斜面上位にある古墳から順番に1号墳~4号墳、そして東側に離れて位置する古墳を5号墳と呼ぶことにする。



第105図 梅ヶ崎古墳群調査区設定図 (S=1/2500)

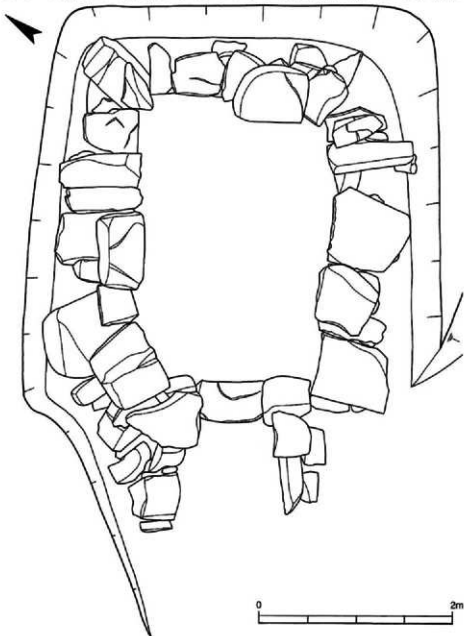
1. 1号墳

(1) 調査前の状況

1号墳は、梅ヶ崎古墳群の調査対象古墳の中では最上部にあり、2号墳、3号墳、4号墳の上位側の標高25mを測る丘陵部の緩斜面上に位置する。調査前は、墳丘の大部分は削平され畑として利用されており、石室の東側は段々畑の崖面になっていた。その崖面に羨道右壁端部の石材がわずかに露出した状態で、表面観察上は古墳とはわかりにくい現況であった。微地形をみると古墳は北東から南西に傾斜する尾根上にあり、北側と西側には谷が入って急な崖面となっていた。

(2) 墳丘

墳丘の大部分は畑の開墾時に削平を受け欠失していたが、部分的に遺存しているところもあった。唯一、北トレンチでは最終墳丘の墳丘裾部が確認でき、浅黄色砂質土層が残っていた。この部分の最大残存厚は約30cmである。奥壁側の墓坑端部から約90cmのところには羨道坑の跡が見つかり、このラインは築造時の地表面をわずかにカットして掘り方内へ続いていた。東トレンチでは最大残存厚約



90cmほどの明瞭な版築構造の土層が見られた。鈍い黄色土の中に橙色砂質土が約10cmの厚さで3段ほど積み重ねられていた。この版築部分も石室中心部から約2.4mのところではほぼ垂直にカットされ、東側は畑になっていた。西トレンチには黄褐色土の盛土が見られるが、これは斜面上位の地山を削り、低い西側に盛り土をしたものと思われる。おそらく墓坑を掘る前に地表面の整形を行ったものと推測される。トレンチの土層観察の結果からすれば、直径約9.8mの円墳であ

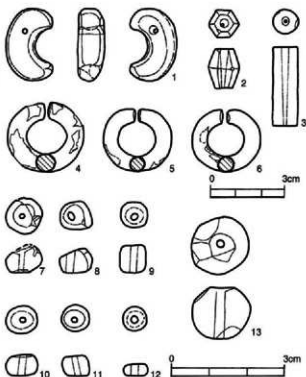
第106図 1号墳石室平面図 (S=1/40)

つたとみられる。

(3) 石室

内部主体は南西に開口する横穴式石室である。主軸はN53°Eを指す。袖部側と奥壁側の幅がほぼ等しい玄室に、短い羨道を付設する平面形である。石室の残存長4.8mで両袖式の石室である。墓坑の平面形は長方形に近いが奥壁側より袖部側がわずかに長い。掘り方は築造時の地表面から掘り込んでいる。構築石材は付近で入手容易な花崗岩を使用している。

玄室 平面形はほぼ長方形で奥壁には1枚の大型の鏡石が据えられ、側壁もまた大型の石材を横長に使い、左右側壁の腰石は3枚ずつできれいに面がとってある。持ち送り状に積まれた



第107図 1号墳出土装身具実測図 (S=2/3、S=1/1)

第46表 1号墳出土耳環計測表

種類	図版	外法径 (cm) 長径・短径	内法径 (cm) 長径・短径	断面径 (cm) 長径・短径	実径部 (cm) 幅	備考
107-4	44-4	3.06×2.78	1.59×1.34	0.73×0.8	0.1	銅芯銀張り
107-5	44-5	2.77×2.5	1.5×1.35	0.62	0.12	銅芯銀張り
107-6	44-6	2.77×2.5	1.5×1.35	0.65	0.15	銅芯銀張り

第47表 1号墳出土小玉類計測表

種別	図版	直径mm	孔径mm	厚さmm	材質	色調
107-7	44-7	9.5	1.5	7.1	瑪瑙	オレンジ
107-8	44-8	8.3	2.0	6.5	ガラス	コバルトブルー
107-9	44-9	6.8	1.9	7.7	ガラス	コバルトブルー
107-10	44-10	8.5	1.7	5.4	ガラス	コバルトブルー
107-11	44-11	7.3	1.5	5.5	ガラス	コバルトブルー
107-12	44-12	6.4	2.0	3.3	ガラス	コバルトブルー
107-13	44-13	15.5	2.1	13.7	瑪瑙	オレンジ

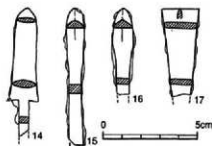
2段目以上の石材は面がやや不揃いで粗雑な感じがする。持ち送りの角度は残存高までで右壁が3°左壁が15°である。玄室長3.2m、玄室幅2.3m、残存高は床面から奥壁が約1.8m、右壁が約1m、左壁が約1.0-1.2m、玄門の右袖は1.06m、左袖は0.96mを測り、玄門高1.06mを確保する。框石は0.42×0.78mで隅丸長方形に近い扁平な石材を使用している。

羨道 平面形は平行な羨道で、右壁長約1.0m、左壁長約1.2mを測る。後世の擾乱等による石材の抜き取り痕は確認できなかった。羨道右壁には、0.94×1.02m、厚さ0.14mの1枚の扁平な板石を立てて据えている。

閉塞施設 2枚の小型の扁平な板石を框石の外側から立てかけて閉塞石とし、その脇に拳大の石が11個ほど積まれていた。

(4) 遺物

出土状況 玄室内からは勾玉1点、切子玉1点、管玉1点、ガラス小玉5点、瑪瑙製丸玉1点・小

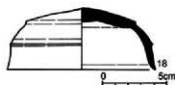


第108図 1号墳出土鉄製品実測図
(S=1/2)

玉1点、鉄鏃4点、耳環3点が出土した。勾玉は玄室内北東部で出土。出土レベルは床面より約20cm高く、原位置を留めていない状況であった。切子玉(2)、耳環(5)は、玄室内北西部の埋土中より出土。管玉(3)、耳環(4)は、玄室内南東部より出土。耳環(6)は南西部より出土。他の小玉類と鉄鏃類は玄室内各所の埋土中より散らばって出土した。また墳丘の南側にあけたトレンチからは明瞭な2段の稜を持つ坏蓋が出土した。

第46表 1号墳出土鉄鏃計測表 ()は残存値 単位はcm

神国	図版	出土位置	全長	身			尾			備考
				長	変	幅	長	変	幅	
108-14	44-14	玄室内	(6.8)	4.8	-	1.5	2.0	0.6	-	長三角形式
108-15	44-15	玄室内	(7.2)	2.8	-	1.0	4.4	0.7	-	棒筒式
108-16	44-16	玄室内	(4.6)	2.0	-	1.2	2.6	0.7	-	棒筒式
108-17	44-17	玄室内	(4.7)	4.7	-	2.0	-	-	-	方筒式



第109図 1号墳出土土器実測図
(S=1/3)

出土遺物

鉄身具 (第107図 図版44)

勾玉(1) 薄緑色の翡翠製。全長2.87cm、厚さ1.85cm。頭部に片面から穿孔された一孔をもつ。孔径は一方が0.35cm、他方が0.20cm。表面は丁寧に磨いてある。

切子玉(2) 水晶製。全長1.58cm。上部直径0.74cm、中部直径1.20cm、下部直径0.70cm。片面穿孔で孔径は一方が0.37cm、他方が0.11cmである。

管玉(3) 濃緑色の碧玉製。全長3.18cmで直径は両面ともに1.00cm。片面穿孔で孔径は一方が長径0.33cm、短径0.29cm、他方が0.13cm。表面は丁寧に磨いてある。

小玉(7~12) 計測表は第47表に掲げる。

丸玉(13) 計測表は第47表に掲げる。

耳環(4~6) 計測表は第46表に掲げる。

鉄製品 (第108図 図版44)

鉄鏃(14~17) 計測表は第48表に掲げる。

土器 (第109図 図版44)

18は坏蓋で口径11.6cm、器高4.8cm。口縁部は外下方に開いた後、やや外反して鋭い端部に至る。天井部と口縁部との境には2段の明瞭な稜をもつ。天井部外面は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロは右回転。

2. 2号墳

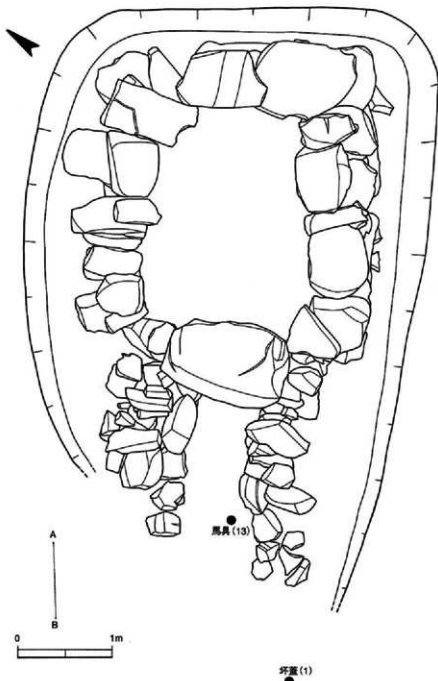
(1) 調査前の状況

2号墳は1号墳の南西側斜面下位に築かれており、南東側斜面下位に築造されている3号墳ともほぼ等間隔で隣接し、標高は約21mである。2号墳の北側は荊などが巻き付く雑木の小さな茂みで、西側は自然崩落で約10m落ち込む急峻な崖になっていた。調査前は、畑の耕作土の下で表面観察上は石材等が全く確認できず、畑の崖面に須恵器片が若干認められる程度であった。墳丘は開墾時の削平を

受けており、半分以上が欠失していた。

(2) 墳丘

墳丘の半分以上は削平を受けており、最大残存厚は南東側緩斜面で約50cmであった。唯一、東トレンチでは墳丘裾部が確認され、石室中心部から2.1mの所で、地山面から掘り込んだと思われる掘り方ラインも見つかった。南トレンチには多くの崩落石が見つかり、石室中心部から3.5mのところまで畑の崖面となっており、ほぼ垂直に近い状態で切られていた。北トレンチでは石室中心部から2.6mのところ掘り方ラインが確認された。西トレンチでは東側の地山を整形し、その掻き出した黄褐色土を厚さ40~50cmほど斜面下位の西側に、東側より若干高く積み、そこから墓坑を掘り込んで



第110図 2号墳石室平面図 (S=1/40)

いた。本古墳はトレンチの土層観察から墳丘径約9.2mの円墳と推定できる。

(3) 石室

内部主体は南西に開口する両袖式単室横穴式石室である。主軸は $N46^{\circ}E$ を指す。袖部側の幅は奥壁側の幅とほぼ同じであるが、右壁がやや胴張り気味の玄室に細長い狭道を付設する平面形で、石室残存長は約5.4mである。本古墳群の中では唯一、楣石を留めている。墓坑の平面形は長方形に近いが左壁側がやや丸くなっている。構築石材は付近で入手容易な花崗岩を使用している。

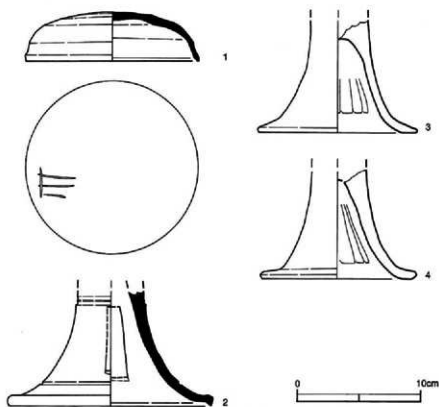
玄室 平面形は長方形に近く、1号墳同様奥壁には1枚の大型の鏡石が据えられ、側壁もまた大型の石材を横長に使っている。左右側壁の腰石は2枚ずつできりに



第111図 2号墳遺物出土状況図 (S=1/20)

面がとってある。特に右壁側は腰石上面レベルがほぼそろっている。持ち送りの角度は残存高までで右壁が7°、左壁が16°である。玄室長2.7m、玄室幅2.2m、残存高は床面から奥壁が約1.5m、右壁が約1.0-1.3m、左壁が約1.0-1.6m、玄門の右袖は0.98m、左袖は0.92mを測り、玄門高は0.98mを確保する。框石は長さ約0.9mで羨道幅とほぼ同じである。

羨道 平面形はほぼ平行で細長く、羨道幅約0.9m、右壁約2.7m、左壁約2.2mを測る。右壁側は約0.8mの柱状の石を3石並べ、その隙間に拳大の塊石を乱雑に積んでいる。右壁端部付近は扁平で薄



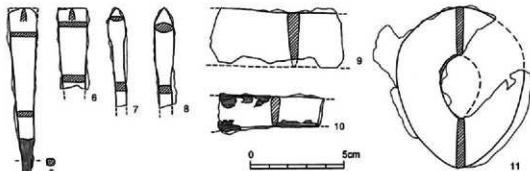
第112図 2号墳出土土器実測図 (S=1/3)

い石を並べている。左壁側は床面から高さ10~20cmの盛土をしてその上に人頭大の扁平な角礫を積んでいる。

閉塞施設 一枚の蒲鉾型の扁平な板石を面のとってある方を玄室側に向け、外側から立てかけて閉塞石とし、左右の袖石との間に1個ずつ詰め石が打ち込んであった。



第113図 2号墳出土耳環実測図 (S=2/3)

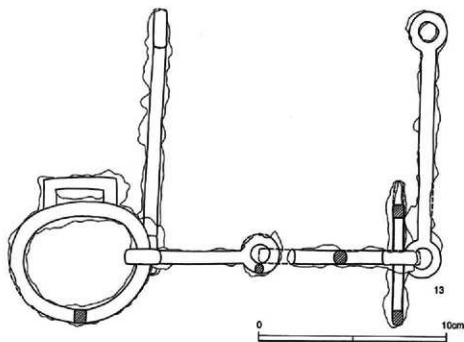


第114図 2号墳出土鉄器実測図 (S=1/2)

第49表 2号墳出土鉄器計測表

() は残存値 単位はcm

押図	図号	出土位置	全長	身 部		頸 部		臺 部		備 考
				長さ	幅	長さ	幅	長さ	幅	
114-5	45-5	玄室内 (8.6)	6.9	1.5	2.0	0.6	-	-	長三角形	
114-6	45-6	玄室内 (4.3)	4.3	1.6	-	-	-	-	方頭式	
114-7	45-7	玄室内 (5.2)	1.8	0.9	3.4	0.5	-	-	柳葉式	
114-8	45-8	玄室内 (5.2)	3.4	1.0	1.8	0.7	-	-	柳葉式	



第115図 2号墳出土馬具実測図 (S=1/2)

(4) 遺物

出土状況

支室内からは耳環
1点、鉄鍔4点、鉄
刀片2点、銅1点、
羨道からは馬具
(轡)1点、羨道左
壁端部近くの墳丘付
近から土師器の高坏
脚部2点、羨道右壁
端部付近で完形の須
恵器坏蓋1点、2号
墳の北東側斜面上位
の墳丘裾部付近にあ
けたトレンチより須

恵器高坏の脚部1点が出土した。このうち墳丘裾部で据えられた状態で出土した高坏2点と、羨道床面レベル近くに置かれた坏蓋は、その状況から石室構築時の祭祀に伴う遺物と思われる。

出土遺物

土器(第112図 図版44) 1は坏蓋で口径13.6cm、器高3.9cm。口縁部は外下方に開いた後やや外反して端部に至り、端部は浅い段をもつ。天井部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ。天井部内面は回転ナデ後静止ナデ。他は回転ナデ。天井部内面にヘラ記号が刻まれている。2は須恵器の高坏の脚部で脚裾部径15.8cm。内外面ともに回転ナデ。長脚2段透かし。3と4は土師器の高坏の脚部で、3は脚裾部径12.6cm、脚筒部外面はミガキ、内面はヘラケズリ。脚裾部内外面は回転ナデ。

鉄製品(第114・115図 図版45)

鍔(5~8) 計測表は第49表に掲げる。

刀(9・10) 9は鉄刀片であり、残存長7.1cm、幅2.9cm、厚さ0.4cm。10も鉄刀片で、残存長5.6cm、幅2.0cm、厚さ0.4cm。木片が付着していた。9と10は玄室内北西部床面の、ほぼ同位置から出土しており、同一個体の可能性が高い。

銅(11) 倒卵形の銅で、長径8.6cm、短径6.7cm、厚さ0.5cm。内孔は長径3.3cm、短径2.1cmである。

馬具(13) 鉄製の轡で、2連の銜をもち、銜先には鏡板と引き手が取り付く。鏡板は7.5×6.4cmの素環の楕円形で、外寸3.9×1.3cm、内寸2.5×0.8cmの長方形の立間が付く。

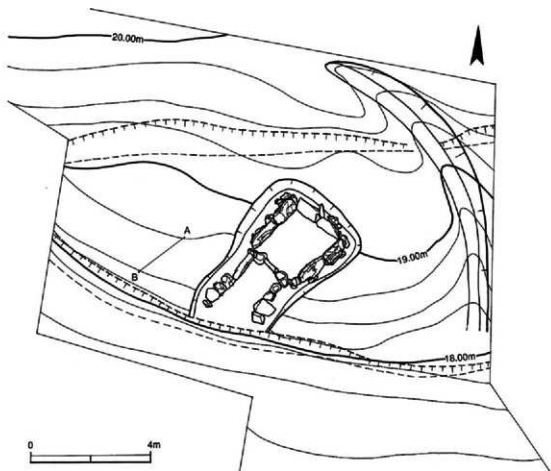
装身具(第113図 図版45)

耳環(12) 銅芯銀張り。外径径の長径2.90cm、短径2.67cm、内径径の長径1.50cm、短径1.35cm、断面径0.73cm、突合部幅0.16cm。

3. 3号墳

(1) 調査前の状況

3号墳は2号墳の南東側斜面下位のなだらかな丘陵上に位置し、標高約19mである。また南東側斜面下位に位置する4号墳にも隣接している。調査前は段々畑の耕作土中に埋もれており、表面観察上は全く確認できず、畑に設定したトレンチにおいて発見されたものである。段々畑の開墾によって、墳丘は大部分が削平を受け欠失し、石室の石材の基底部に置かれた腰石を残存するのみであった。



第116図 3号墳墳丘遺存状況図 (S=1/125)

(2) 墳丘

墳丘は、畑の開墾時の削平や石材の抜き取り等により大部分が欠失していた。特に南側は段々畑の崖面となり羨道が途中で斜めに切られ、墳丘は全く残っていなかった。北側と西側は掘り方の内部のみわずかに盛土が確認された。最も遺存状態が良かったのは東側で、最終墳丘の裾部と墳丘盛土が最大残存厚約60cmほど確認された。そして古墳の北東斜面には、馬蹄形を呈するとみられる周溝が10mほど巡っているのが確認された。斜面上位の北側と下位の南側の端は途中で消滅しており、畑の開墾時に削られたと考えられる。周溝の幅は約60~110cm、深さは約30~50cm、断面形は皿状を呈している。北側と東側のトレンチの土層からも墳丘裾部が検出され、これを基にすれば直径約10.5mほどの円墳と推定できる。

(3) 石室

内部主体は南西に開口する横穴式石室である。主軸はN48°Eを指す。玄室の平面形は台形に近く、わずかに「ハ」の字状に開く羨道を付設する。石室の残存長は約4.5mで、両袖式の石室であるが玄室と羨道の幅の差が約30cmと少ない。墓坑の平面形は南側が削平されているが、長方形に近く、袖部付近でややくびれている。構築石材には付近で入手容易な花崗岩を使用している。

玄室 玄室長2.01m、奥壁幅1.75m、袖部幅1.57m、左壁長1.93m、右壁長2.05mを測る。残存していた石材は基部となる腰石だけで、右壁中央部の最も高いレベルを持つ石材は、畑の表土面からわずか20cm下であった。左右の袖石及び右袖石に接する羨道の最初の石は、抜き取り痕が確認された。框石として長さ46cm、幅12cm、厚さ16cm程度の直方体に近い割石と、12×21cm程度の扁平な自然石が用いられていた。床面には

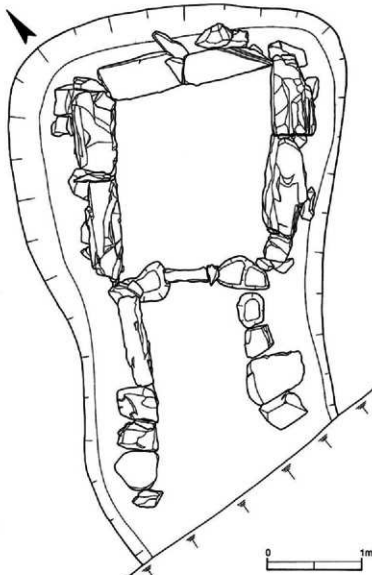
8割程度、敷石が敷かれた状態で検出された。長径15~20cm前後の平たい角礫が使用されており、玄室内左壁の両端付近とやや袖部に近い南西部の3ヶ所で、敷石が剥がされているのが確認された。

羨道 左壁はほぼ直線的であるが、右壁は残存部まではやや外へ開き、幅1.3m、右壁長1.66m、左壁長2.5mを測る。羨道を構築する石材は、右壁側は床面の地山に据え置かれているが、左壁側の中央部から端部にかけては厚さ10~15cm程度の盛土上に置かれていた。

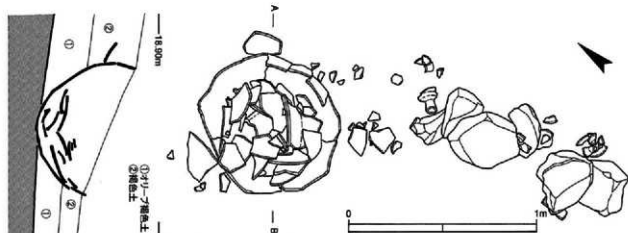
(4) 遺物

出土状況

玄室内には敷石が約8割程度残っており、敷石の間から勾玉1点、管玉4点、切子玉3点、ガラス小玉14点が出土した。玄室内は攪乱を受けており、埋葬時の状態を保つ遺物は少なく、いずれも埋土中のものである。このうち管玉3点、切子玉1点、ガラス小玉6点は、玄室内北東部の右壁近くで半径15cm程度の円内から集中的に出土した。羨道左壁の西側墳丘裾部付近からは須恵器の甕1点、高坏1点、器台片、土師器の高坏1点、碗1点が出土した。特に甕は、古墳築造時の地表面に置かれた



第117図 3号墳石室平面図 (S=1/40)



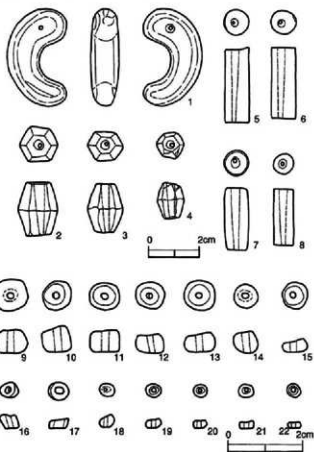
第118図 3号墳遺物出土状況図 (S=1/20)

状態で出土し、底部が残存しており、内部からは土砂や甕自体の破片とともに器台片も出土した。

出土遺物

土器 (第120図 図版45・46)

23は須恵器高坏で、口径12.4cm、器高12.8cm、脚裾部径11.5cm。口縁部は外傾して端部に至る。端部は丸く、坏部外面底部にカキメ。他は回転ナデ。24は器台の一部で、甕の内部から見つかった。口唇部端面に櫛歯状波文、それより下は、口縁外面に波状文、1条突帯、波状文、2条沈線、波状文、2条沈線、波状文、1条沈線が施されている。25は大甕で、口径47.0cm、器高87.0cm、体部はタタキ、頸部内外面は回転ナデ。口頸部に2条の沈線が3段、その間に櫛歯状工具によるノの字文が巡っている。大浦4号墳西側周溝内から出土した甕



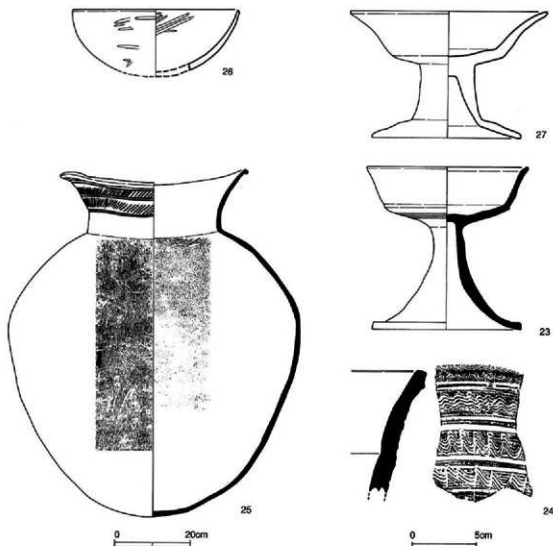
第119図 3号墳出土土器身具実測図 (S=2/3、S=1/1)

第50表 3号墳出土管玉計測表

陣図	図版	長さ (mm)	直径 (mm)		孔径 (mm)		穿孔	色調	材質	備考
			長径	短径	長径	短径				
119-5	45-5	30.0	10.5	—	3.0	—	片面	濃緑色	碧玉	
119-6	45-6	28.4	10.2	9.6	3.0	—	片面	濃緑色	碧玉	
119-7	46-7	24.7	9.2	—	3.8	—	片面	濃緑色	碧玉	穿孔部磨減
119-8	45-8	22.7	8.2	7.9	3.5	—	片面	濃緑色	碧玉	穿孔部磨減

第51表 3号墳出土小玉計測表

陣図	図版	直径mm	孔径mm	長さmm	材質	色調	陣図	図版	直径mm	孔径mm	長さmm	材質	色調
119-9	45-9	8.9	2.1	6.1	ガラス	コバルトブルー	119-16	45-16	4.9	1.7	3.6	ガラス	青緑
119-10	45-10	8.1	1.9	7.0	ガラス	コバルトブルー	119-17	45-17	5.4	2.7	2.5	ガラス	青緑
119-11	45-11	8.1	2.1	5.8	ガラス	コバルトブルー	119-18	45-18	4.0	1.1	3.3	ガラス	緑
119-12	45-12	7.3	1.5	5.0	ガラス	コバルトブルー	119-19	45-19	3.8	1.5	2.4	ガラス	青緑
119-13	45-13	8.3	1.7	5.2	ガラス	コバルトブルー	119-20	45-20	3.6	1.2	2.3	ガラス	緑
119-14	45-14	6.6	2.3	5.3	ガラス	コバルトブルー	119-21	45-21	4.1	1.3	2.0	ガラス	青緑
119-15	45-15	6.8	2.0	3.5	ガラス	コバルトブルー	119-22	45-22	3.8	1.3	1.7	ガラス	青緑



第120図 3号墳出土土器実測図 (S=1/3, S=1/10)

に、形状、大きさとも類似している。26は土師器の椀で、口径13.0cm、器高5.3(推定)cm。内外面ともにヘラミガキ。27は土師器の高杯で、口径14.9cm、器高9.9cm、脚裾部径11.5cm。脚筒部外面は縦方向のヘラケズリ。脚筒部内面はヘラケズリ後ミガキ。脚裾部内外面はナデ。他はミガキ。杯部内面底部はナデ。

装身具(第119図 図版45)

勾玉(1) 黄褐色の瑪瑙製勾玉。全長3.87cm、厚さ2.35cm。頭部に片側から穿孔された一孔をもつ。口径は一方が0.36cm、他方が0.15cm。表面は丁寧に磨かれている。

切子玉(2~4) 2~4は水晶製切子玉。2は全長2.10cm、上部直径0.99cm、中部直径1.53cm、下部直径1.00cmを測る。片面穿孔で口径は一方が0.39cm、他方が0.15cm。3は全長1.93cm、上部直径0.76cm、中部直径1.37cm、下部直径0.74cmを測る。片面穿孔で口径は一方が0.35cm、他方が0.15cm。4は全長1.43cm、上部直径0.72cm、中部直径1.05cm、下部直径0.64cmを測る。片面穿孔で口径

は一方が0.34cm、他方が0.20cm。

管玉（5～8） 計測表は第50表に掲げる。

ガラス小玉（9～22） 計測表は第51表に掲げる。

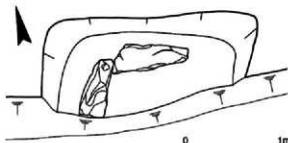
4. 4号墳

(1) 調査前の状況

4号墳は3号墳の南東側斜面下位の、調査区内では最も低い地点に位置し、標高は約16mである。調査前は段々畑の崖面となっていたため、表面観察上は全く確認できず、トレンチ調査によって古墳であると確認されたものである。

(2) 墳丘

墳丘は全く残っておらず、畑の開墾時に石材の抜き取りとあわせて削平されたものと考えられる。古墳北側の斜面上位にトレンチを設定し、土層を観察したところ、わずかに細い溝らしき遺構が見つかったが、周溝とはみなしがたく古墳の規模等については不明である。東西のトレンチには、開墾時



第121図 4号墳石室平面図 (S=1/40)

の整地土とみられる水平堆積の層が8層程度確認された。

(3) 石室

遺存していた石材は、本古墳群中最も少なく、玄室左壁奥の腰石、それに接する奥壁と敷石のみであった。主軸はN14°E（推定）を指す。墓坑は奥壁付近しか残っていないが、基底面の奥側は幅1.65mを測り、残存する深さ70cm。緩斜面と

なっている地山をうまく整形し、基底部が平坦に造られている。構築石材は他の古墳と同様に、花崗岩を使用している。

玄室 残存する玄室構築材は2石のみであり、残存玄室長0.5m、残存玄室幅0.9m、残存高は床面から0.57mを測る。両石材ともに、やや内傾させて横長に据えられており、傾斜角度は左壁が約4°、奥壁が約15°であった。墓坑基底面の形状から推定すると、奥壁として使用された石材はこの1石のみであった可能性もあり、非常に小型の石室をもつ古墳であったと想定される。構築過程としては、まず奥壁として使用する石材を墓坑奥側のほぼ中央付近に据えて石室自体の位置を決める。次に、その奥壁を両側から挟み込むようにして、左右側壁の腰石として使用する石材を順次、奥側から羨道側に向かって据えていったものと考えられる。さらに残存玄室幅が0.9mと、他の古墳に比べて非常に狭いことをもとにして考えると、この古墳の内部主体は壑穴系横口式石室であった可能性もある。また、玄室内床面には、長径20cm、厚さ7cm前後の扁平な12個の敷石が残存していた。

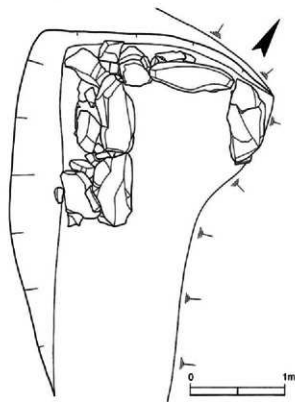
5. 5号墳

(1) 調査前の状況

5号墳は、1～4号墳が築造されている尾根から約80m東に離れた別の尾根上にあり、4号墳とはほぼ同じ標高に位置する古墳である。標高約15m。調査前の付近一帯は、最近まで畑として利用されており、周辺には大小の雑木が無数に生い茂っていた。その間を西から南へ緩やかにカーブする、幅3～4m、深さ1～2.5mの皿状の小さな谷が走っていた。開壘時の削平や谷の上位からの雨水等の流水作用による自然浸食により、墳丘並びに石室の大半は流失しており、谷筋の崖面に石室構築材の一部が露出した状態であった。

(2) 墳丘

墳丘は、斜面上位からの流水による浸食並びに畑の開壘時の削平等で大部分が欠失していた。特に流水路は支室の右壁側をかすめて西から南へカーブしており、石室の右壁側が大きく削られていた。西トレンチでは、石室中心部から約2.5m地点まで墳丘盛土が残存しており、そこから西側では畑の開壘時の整地層が確認された。北トレンチでは、掘り方の端から約1.8m付近までは墳丘盛土が残存していたが、それより北側は深さ約1.5mのV字状の小さな谷によって浸食され失われていた。東トレンチでも同様に、石室右壁側の掘り方が削られ欠失していた。南側は急峻な崖になっており、墳丘は全く残存していなかった。

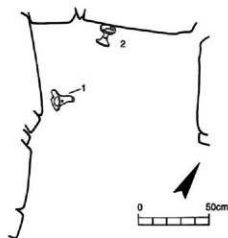


第122図 5号墳石室平面図 (S=1/40)

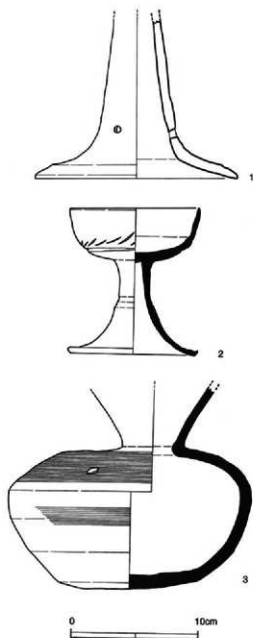
(3) 石室

内部主体の開口方向は、他の4基の古墳よりはやや東に向いており、主軸はN34°Wを指す。石室右壁側の大半は、斜面上位からの流水の影響などで剥ぎ取られて崖面になっている。このため石室の形態や大きさは不明である。墓坑自体も上部や右壁側が削り取られて深さや形状ははっきりしないが、緩やかに傾斜する地山を削り、ほぼ長方形の基底面を造っていたと思われる。構築材には付近で入手容易な花崗岩を用いている。

玄室 玄室奥壁幅1.17m、残存左壁長1.50m、残存右壁長0.78mを測る。残存する石室構築材は、3・4号墳同様、腰石のみでそれ以上の石はなかった。残存していた石材は、



第123図 5号墳石室内遺物出土状況図 (S=3/80)



第124図 5号墳出土土器実測図 (S=1/3)

位置に口頸部が大きく開いて立ち上がる。底部から体部中位までは回転ヘラケズリ、体部上位はカキメ、口頸部は回転ナデ。外面体部上位に直径1.1cmの円盤状の粘土を貼り付けている。

6. その他の遺物

(1) 出土状況

その他の遺物として、滑石製模造品2点と磨製石斧2点が出土した。1, 2はともに4号墳墳丘の石室付近から出土したもので、1は東側の崖面から、2は段々畑に設定したトレンチ内から見つかった。3は途中で2つに折れた状態で出土し、そのうち一方は3号墳墳丘に設定した東トレンチから、もう一方は同じく3号墳の石室北西隅の掘り方より見つかった。4は1号墳と2号墳の間の崖面から出土した。

奥壁と左壁が2石ずつと右壁が1石で、裏込め石は玄室の左壁付近から左壁裏側に大小20個程度残っていた。また奥壁は約12°、左壁は約7°、右壁は約10°内傾していた。

(4) 遺物

出土状況

出土遺物には、須恵器と土師器の高坏1点ずつと平瓶1点がある。玄室内は擾乱を受けていたが、須恵器の完形高坏は玄室中央部の奥壁に接する地点で、さらに土師器の高坏脚部は左壁付近で出土した。出土レベルはほぼ同一の床面であり、副葬時の位置を保ったままの状態である可能性がある。また、表土除去中に北側斜面上位の地山の段落ち部分で、小さな須恵器片が多量に出土した。

出土遺物

土器 (第124図 図版46)

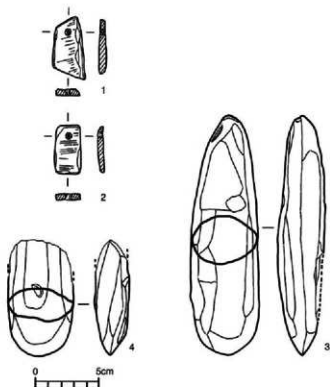
1は土師器の高坏で、脚裾部径15.7cm。脚筒部内面はヘラケズリ。脚裾部の近くに直径0.6cm程度の穿孔がなされている。器面剥落により外面調整は不明。2は須恵器の高坏で、口径10.2cm、器高11.6cm、脚裾部径9.7cm。全面回転ナデ。坏部外面に櫛歯状工具によるノの字状文が巡る。脚筒部外面に2条の浅い沈線が巡る。3は平瓶で、体部最大径19.8cm。体部は最大径を中位よりもやや上に持ち、体部の片寄った位置に口頸部が大きく開いて立ち上がる。底部から体部中位までは回転ヘラケズリ、体部上位はカキメ、口頸部は回転ナデ。外面体部上位に直径1.1cmの円盤状の粘土を貼り付けている。

(2) 出土遺物

石製品 (第125図 図版46)

滑石製模造品 (1・2) 1は長さ5.0cm、幅2.4cm、厚さ0.5cm。2は長さ3.8cm、幅2.1cm、厚さ0.5cm。ともに古墳に伴っていた遺物とみられるが帰属は明らかでない。

磨製石斧 (3・4) 3は長さ18.8cm、幅5.3cm、厚さ3.7cm。刃部幅は両面ともに1.8cm。4は残存長8.8cm、幅5.2cm、厚さ2.6cm。石材はともに玄武岩である。



第125図 出土石器・石製品実測図 (S=1/3)

7. 小結

梅ヶ崎古墳群は、榎野川の河口に近い山口市大字江崎の相原地区に位置する。古墳が立地する丘陵の南側には、周防灘まで続く穏やかな山口红が広がっており、非常に景観の良い場所に立地している。

今回調査した5基の古墳のうち、調査区内の最上部に位置する1号墳(標高約25m)から、最下位の4号墳(標高約16m)までの標高差はわずか9mで、ほぼ3mの間隔で密集して築造されている。さらに、東の5号墳に至るまでの間のほぼ同じ標高地点に、少なくとも5基の古墳が確認されている。これらは、いずれも海を臨む丘陵南斜面に築造されており、その立地のあり方には海との関連が強く想定される。

調査前の付近一帯の緩斜面は、近年まで野菜などを栽培する段々畑として利用されていた。今回調査した5基すべてが畑の開墾時に削平を受け、墳丘・主体部ともに大きく損壊していたが、計測不能な2基(4号墳及び5号墳)を除き、残存状況から見て、他はすべて直径9~10m前後の規模を有する小型の円墳であったと推定される。

特に1号墳と2号墳は、墓坑や石室の規模や形態、石材の組み方、閉塞状況、使用されている石材等、よく似ている部分が多かった。3号墳は羨道がやや長く、石室の規模や形態、石材の掘え方等も1・2号墳とはやや異なっていた。また、玄室内の床面には敷石が敷かれ、その間からは玉類などの装身具が出土した。さらに梅ヶ崎古墳群では唯一、馬蹄形の周溝の一部も検出された。なお、1~3号墳の主体部はいずれも両袖式の横穴式石室であった。

4号墳及び5号墳については、残存状況が極めて悪く判断しがたいものの、玄室幅が約1m前後で非常に狭いものであることからすれば、今回、大浦古墳群で7基ほど見つかった竪穴式横口式石室であった可能性もあると推定される。

石室の開口方向についてみると、調査を行った5基の石室の主軸がすべて等高線にほぼ直交してお

第52表 梅ヶ崎古墳群古墳一覧表

号墳	墳丘		内部主体								玄門	備考
	形状	直径	形式	主軸方向	石室長	女室長	玄室幅	供道長	供道幅	玄門幅		
1	円墳	9.8	横穴式	N63°E	(4.7)	3.1	2.3	(1.6)	1.2	0.8	有	
2	円墳	9.2	横穴式	N46°E	(5.4)	2.7	2.2	(2.7)	0.9	0.8	有	
3	円墳	10.5	横穴式	N48°E	(4.5)	2.0	1.6	(2.5)	1.3	0.6	—	敷石
4	—	—	—	(N14°E)	(0.5)	(0.5)	—	—	—	—	—	敷石
5	—	—	—	N34°W	(1.5)	(1.5)	1.1	—	—	—	—	

り、1～3号墳はいずれもN46°EからN53°Eの間（南西方向）を指し、4号墳は推定でN14°E（南西方向）、また5号墳はN34°W（南東方向）を指していた。このことから、開口方向についても明らかに海の方向を意識した構造であったと推定されよう。

出土遺物や石室形態等から築造時期を見てみると、6世紀前半代にまず1号墳が築造され、ついで6世紀後半代に2号墳、さらに3号墳が継起したものと推定される。4号墳、5号墳については損壊が大きく、築造時期の手がかりに乏しいが、両墳が竪穴系横口式石室であったとすれば、1号墳と同様に6世紀前半代にまで遡る可能性もあろう。その場合には5号墳の土器は追葬時のものと考えられる。しかし、大浦古墳群では相対的に丘陵上位より順次下位へ築造地点が推移しており、そうした築造原則があったとするならば、4号墳の位置はこれと矛盾することになる。これが造墓集団の差に起因するものかを含めて、さらに今後検討する必要がある。

今年度5基の古墳の調査を行った梅ヶ崎古墳群は、畑の開墾時における削平のため、周辺には表面観察上確認できない古墳もまだ埋存している可能性があり、次年度には、1～4号墳の位置する尾根と5号墳の位置する尾根の間の地区や、さらに東側の大浦古墳群（Ⅱ地区）に近い地区での調査が予定されている。こうした状況を勘案すれば、梅ヶ崎古墳群は最終的には、20基前後の古墳から成る群集墳であると推定される。

眼前に海が迫り、農業生産基盤を欠いたその立地からすれば、梅ヶ崎古墳群は、海との深い関わりを有した集団の奥津城であったとみられるが、今後さらにこの地域周辺の調査が進み、古墳群の形成過程や性格等について明らかにされていくことを期待したい。

（奥原）



1号墳調査前



1号墳崩落石出土状況



1号墳石室完掘



1号墳玄門閉塞



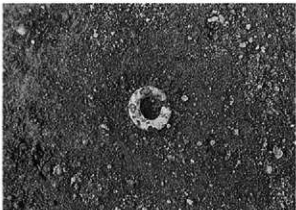
1号墳玄室内管玉出土状況



1号墳玄室内耳環出土状況



2号墳石室完掘



2号墳玄室内耳環出土状況



2号墳羨道内馬具出土状況



2号墳玄室内鏡出土状況



2号墳開口部遺物出土状況



2号墳供獻土器出土状況



3号墳崩落石出土状況



3号墳玄室内敷石



3号墳石室完掘



3号墳玄室内切子玉出土状況



3号墳玄室内遺物出土状況



3号墳西側土器出土状況



4号墳玄室内敷石



4号墳石室完掘



5号墳玄室内遺物出土状況



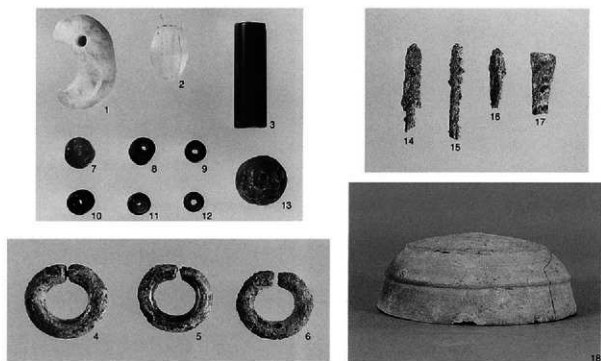
5号墳玄室内高坏出土状況①



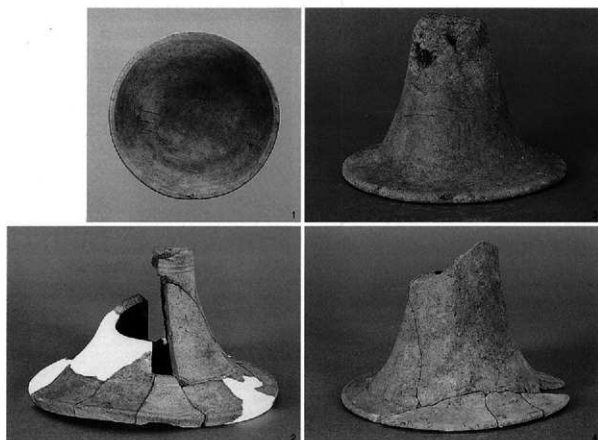
5号墳玄室内高坏出土状況②



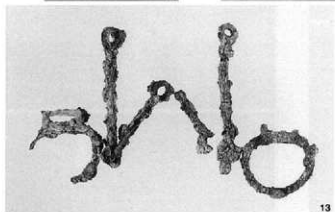
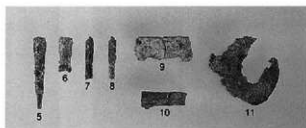
5号墳石室完掘



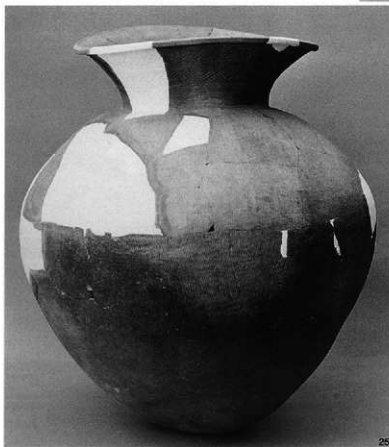
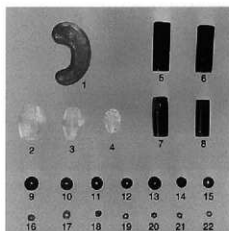
1号墳出土遺物



2号墳出土遺物①



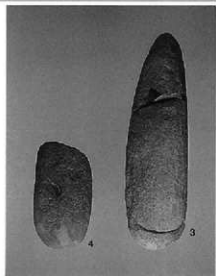
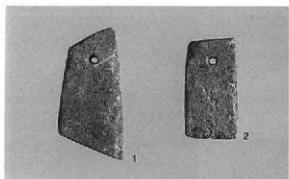
2号墳出土遺物②



3号墳出土遺物①



3号墳出土遺物②



出土石製品



5号墳出土遺物

小 郡 開 作 經 塚

第4節 小郡開作経塚

はじめに

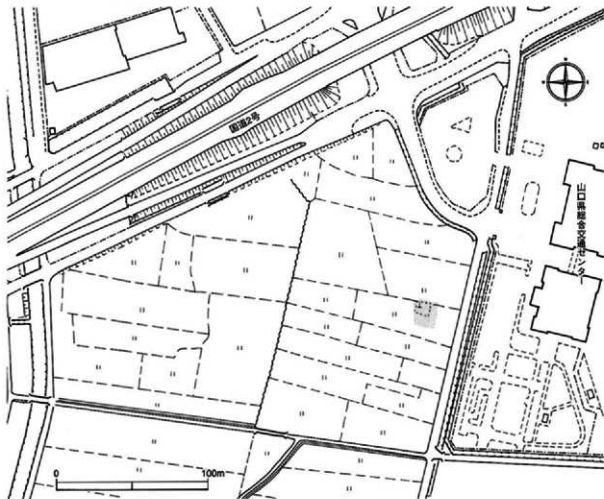
山口県吉敷郡小郡町大字下郷に所在する小郡開作経塚は江戸時代初めの一宇一石経塚である。

文献には小郡開作経塚の名称は見あたらず、開作中の経塚として『防長地下上申』に「経塚堂」、『防長寺社由来』の「中下郷 妙湛寺」の項に「柏崎経塚」が記されている。干拓地内には他に経塚と呼ばれるものはなく、また、小郡町文化資料館には、経塚の石塔部分に「柏崎中」という文字が刻まれているという記録が残されていることから、「経塚堂」「柏崎経塚」ともに今回調査を実施した経塚と同一のものと考え、その名称を小郡開作経塚とした。

1. 位置と現状

小郡開作経塚の位置する干拓地は「小郡開作」と総称され、江戸時代の開作地としては県内でも早い時期のものである。現在、その北側は小郡駅周辺の商業用地並びに住宅地として開発され、南側では水田の大規模な耕地整理も進み、往時の面影を忍ばせる場所は少なくなっている。

小郡開作の干拓の歴史は慶安3（1650）年の慶三開作に始まる。以後、勝間田開作（寛文4年、1664）、延室開作（延宝2年、1674）と続く干拓地は、山口湾に注ぐ榎野川の形成した狭小な三角州地帯に造られたもので、古開作と呼ばれ、標高2～3mの微高地の間を曲流する数条の旧河道が認められる。一方、古開作の南側、元禄3（1690）年に開かれた元禄開作は新開作と呼ばれ、標高1～2m、短冊形の耕地割を持つのが特徴である。それら二つの境はちょうど経塚のある近辺であり、小郡



第126図 調査区設定図 (S=1/2500)

町と山口市の行政区の境にもなっている。

経塚は広い干拓地の水田の中、とり残されたかのように小高く残り、経塔は遠方からも認めることができる。関係者の話によれば、周辺の水田は昭和52年から53年にかけて整備されたということである。その際、経塚は四方をコンクリートブロックにより仕切られた、一辺約8m余りの小高い方形区画に経塔が建てられている現在の姿となったのであろう。

2. 調査の概要

調査は、妙湛寺により築かれたといわれる伝承から、当寺住職による9月22日の安全祈願祭から始まった。水田とは明確に区画された場所にしっかりとした経塔も残ることから、一字一石経塚であれば石塔の直下に経石を納めた埋納坑があることが予想され、短期間に調査が終了するものと思われた。

しかし、調査が進むに従い、経塚は築造以来幾度かの再建を繰り返されており、築造時の経塚は現在の経塔の遙か下にあること、そしてその範囲も、東側・南側の水田下に広がることが判明した。また、遺構面を掘り下げるとつれ水も涌きだし、ポンプにより揚水しながらの作業は困難を極めた。重機による表土除去や写真実測等も含めた調査は3ヶ月を要し、12月26日に終了した。埋納坑は確認されなかったが、経塔の下に当たる位置から経文を墨書した小石を含む多数の経石が出土した。

3. 遺構

遺構の主体は、積石による半球状の塚部とその前面に広がる平坦部である。土層観察（第129図）によると、経塚は築造されて以来少なくとも3期に渡り再建を繰り返されたと考えられる。積み上げられた石の間に砂や小礫が混入していることから、風水害により塚が壊され、土砂に覆われてしまった結果、以前のものよりも高く石等を積み上げ塚を再建したものと考えられる。

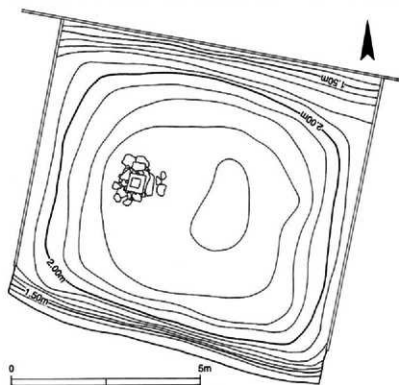
まず、第1期（築造時）経塚は、暗青灰色土の上に堆積した橙色土をブロック状に含むオリブ灰色土に石を置き、平坦部と塚部を構築し、塚部の下側には経石も納められる。また、円形石の下に

は本片が敷かれているのが特徴である。

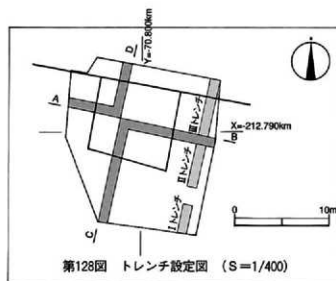
第1期経塚が3層に渡る土砂の堆積により埋もれた後、第2期経塚が営まれる。特徴として、瓦敷きの平坦部を造り、石と瓦片で塚部を盛り上げている。

さらに、第2期経塚の上部に黄褐色の土砂2層の堆積した後、その平坦部に経塔を掘える。それが第3期経塚である。経塔を掘える場所は第2期経塚の塚部の頂部であり、安定を図るため基礎として石を若干積み上げる。

なお、コンクリートブロック

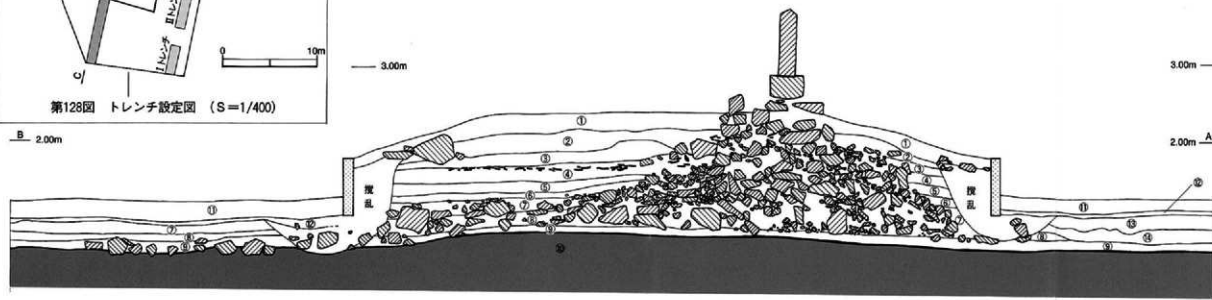


第127図 第3期経塚地形測量図 (S=1/100)



第128図 トレンチ設定図 (S=1/400)

B 2.00m



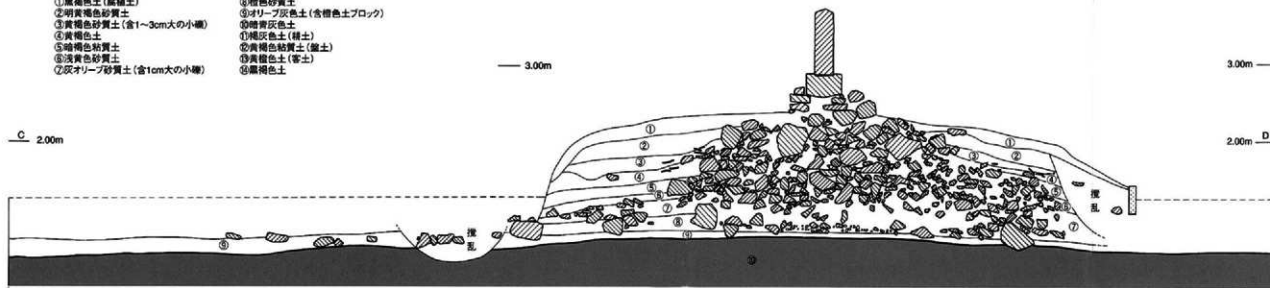
- ①黒褐色土(腐植土)
- ②明黄褐色砂質土
- ③黄褐色砂質土(含1~3cm大の小礫)
- ④黄褐色土
- ⑤暗褐色粘質土
- ⑥淡黄色砂質土
- ⑦灰オリーブ砂質土(含1cm大の小礫)
- ⑧褐色砂質土
- ⑨オリーブ灰色土(含褐色土ブロック)
- ⑩暗青灰色土
- ⑪褐色灰色土(粘土)
- ⑫黄褐色粘質土(腐土)
- ⑬黄褐色土(零土)
- ⑭腐植土

3.00m

3.00m

2.00m

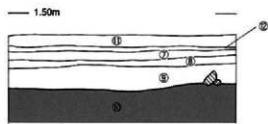
C 2.00m



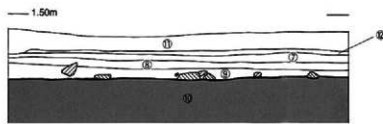
3.00m

3.00m

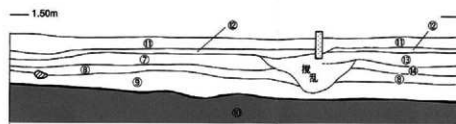
2.00m



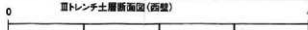
I トレンチ土層断面図(西壁)



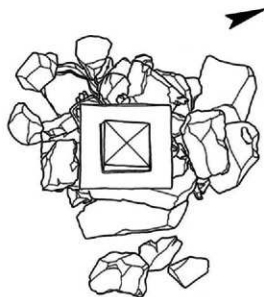
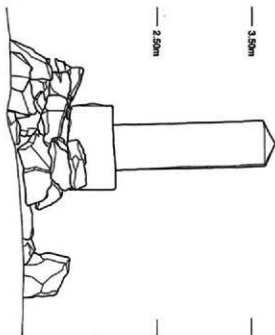
II トレンチ土層断面図(西壁)



III トレンチ土層断面図(西壁)



第129図 トレンチ土層断面図 (S=1/50)



を設置するために、東西南北の四方向が攪乱を受けている。現状ではブロックの見あたらなかった南側においても基礎にあたる部分が確認できた。攪乱の時期は、少なくとも第3期の経塚が営まれ始めてから以降である。

以下、各期における経塚の詳細を述べる。

第3期経塚 (第127図 図版47)

経塚の最も新しい姿である。東西約8.7m、南北約7.6mのほぼ方形の範囲が、東・西・北側でコンクリートブロックで仕切られている。北側のブロックは隣接する水田の畦畔となっており、水田面より約20cm高い。西側及び東側のブロックは北側のものよりも高く、水田面より50cmである。南側はブロックはなく水田面まで緩やかに斜面が続く。

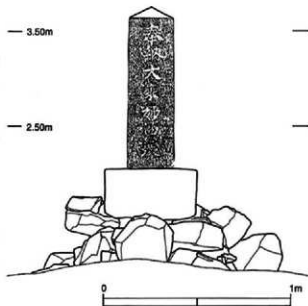
黒褐色の表土に覆われた平坦部は、標高約2.3m、周囲の水田との比高差は約1m。一面雑草が茂り、中央よりやや西寄りに経塔を据える。

経塔 (第130図 図版48)

自然石の基礎の上に花崗岩の基台を置き、その上に剣頭角柱塔を建て標石とする。

基礎となる自然石は大きいもので約50cm、十数個を乱雑に表土より約20cmほど積み上げ、その上に基台を据える。基台の平面形は48×44cmのやや長方形で、厚さは20~26cm。表面はよく磨かれているが、下側の一面についてはやや凸面状になっており、平らに仕上げられていない。そのため、基礎の自然石との間に小隙あるいはコンクリートのかけらを詰めて水平を保っている。また、上面中央には標石を固定するために、底部を載せる部分を深さ2cmほど窪ませている。

標石は一辺25×25cm・高さ87cm。ほぼ垂直に立てられるが、やや西側に傾く。標石の最頂部は標高



第130図 経塔平面図・立面図 (S=1/20)

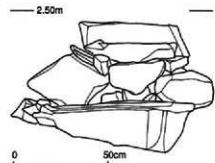
約3.8m。花崗岩製でよく磨かれた切石であるが、表面の風化は進んでいる。東側を向く面には「奉納大乘妙典塚」と刻まれ、塚の正面は東側と考えられる。また、南側の面には「寛文二年壬寅□月□□日」（□は判読不能）という文字を読みとることができる。これらが築造時に刻み込まれたとするならば、築造時期は1662年であり、大乘妙典、つまり法華経を納めたものと考えられる。なお、北側の面にも文字が刻まれているが、風化が進み現在では判読不明である。

第2期経塚（第132図 図版48・49）

埋納坑確認のためトレンチ掘りをしたところ、第3期経塚の地表面から約1mの所に瓦片を敷き詰めた面を検出した。また、経塔直下には瓦片を含む積石が半球状に盛り上げられる部分が確認された。この積石による塚部とその前面に広がる平坦部とで構成される遺構面を第2期経塚とする。塚部の北側・西側、及び平坦部の東側・南側はコンクリートブロック設置のため削り取られているが、ブロックより外側ではそれらの延長部を検出できなかったことから、この期の経塚の範囲は第3期経塚のものとはほぼ同じと考えられる。出土した瓦片や釘は、この場所あるいは近辺に瓦葺きの建物がこの時期以前に建てられていた可能性を示すものである。なお、第132図で示されている経塔部分は、第3期のものであり、第2期において経塔が据えられた位置は、図中より30cm程度低いと思われる。

塚部

経塔の据えられていた位置を中心に直径約4mの半球状に盛り上がる塚である。塚の最上部は標高約2.3m、平坦部からの比高は約1m。主に人頭大の石を積み上げるが、東側裾部の一辺50～70cmの円形や台形に加工された石をはじめ、塚の所々に大きな石も点在する。石の積み方は乱雑であるが、塚の正面に当たる東側には祭壇状に石が組まれている。使われている花崗岩や砂岩は概して脆く、割れやすい。



第131図 祭壇状積石平面図・立面図
(S=1/20)

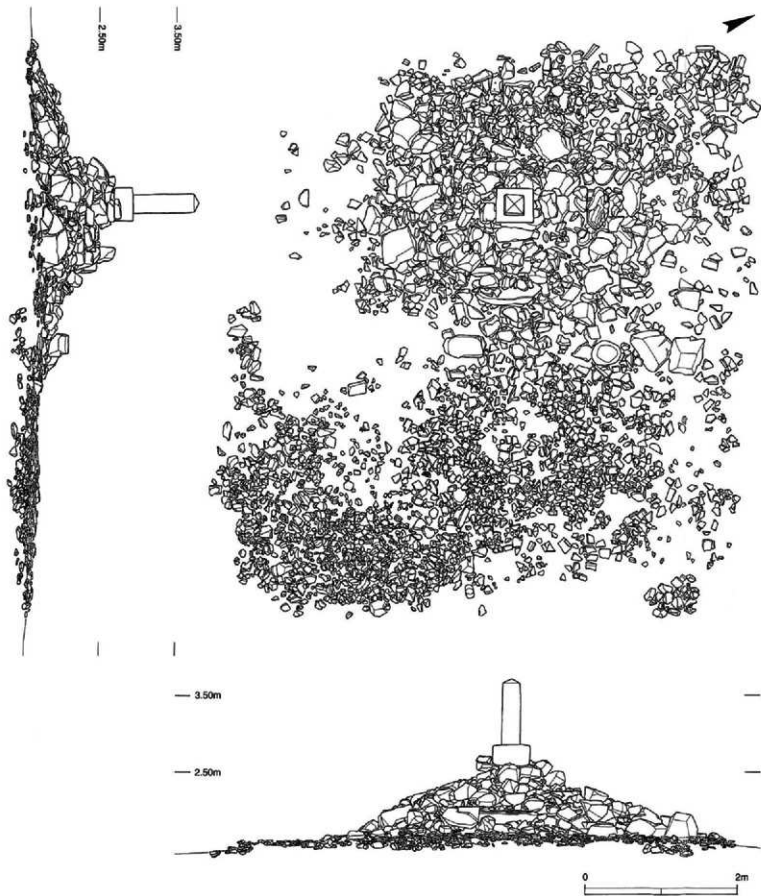
また、石の隙間に入り込んだ砂や小礫に混じり、銅銭や土師器皿、瓦片等が検出された。特に裾部北側では、投棄された形で瓦がまとまって出土した。瓦の種類は、平瓦、丸瓦、軒平瓦、軒丸瓦、棧瓦など様々である。

祭壇状積石（第131図 図版49）

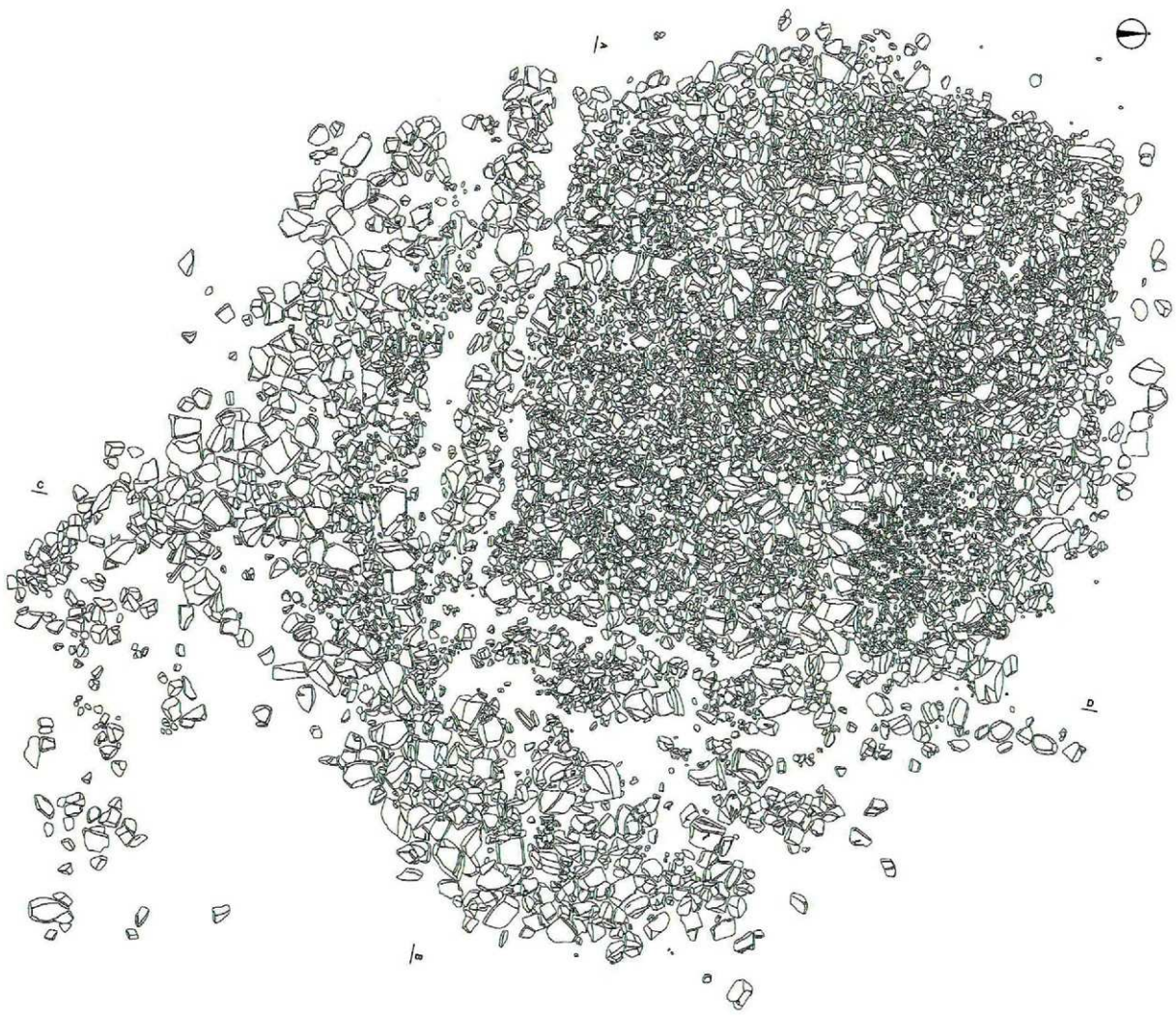
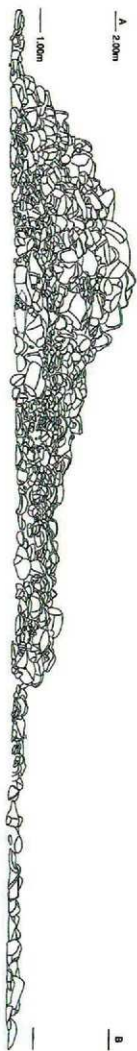
塚の東側裾部から最上部に向かい、自然石を用いて階段状に4段ほど積み上げる。最下段の石が90×40cmと最も大きく、その上3石は30～50cmの石で構成される。瓦片、小礫を詰めて、それぞれの石の上面を水平に保っている。最下段と最上段の石の上面との比高差は約45cm。最下段の石の上には、土師器皿が置かれた形で検出された。

平坦部

瓦葺きの建物が廃絶した後、その瓦を用いて塚部の東側に造られる。標高約1.5m。瓦の多くは意図的に細かく砕かれており、7～8cmの厚さに敷き詰められている。使われている瓦は平瓦が多いが、丸瓦や棧瓦の一部と思われる破片や、軒瓦の瓦



第132図 第2期経塚平面図・立面図 (S=1/50)



第133圖 第1期経塚平面図・立面図 (S=1/50)

当部にあたる破片も確認できた。瓦片の間から鉄釘や土師器皿の破片、礫石が出土。

南東隅には瓦片の下から2～3m四方の敷石が、また、北東隅には1m足らずの小規模な敷石が見られる。いずれも、経塚に伴う施設の基礎の可能性がある。

瓦敷きの建物の位置についてははっきりした痕跡は残されていない。しかしながら、塚の裾部に点在する礫石とも考えられるいくつかの石は、平坦部に建てられた建物の廃絶とともに移動されたものか、あるいは塚部を覆う形で設置された瓦葺きの屋根の礫石が残されたものか、その二つの可能性を示すものと考えられる。

第1期経塚（第133図 図版49）

瓦片及び瓦片より上位に位置する塚を形成する石と瓦片を敷き詰めた平坦部の下側に堆積した土を除去した結果、瓦片を含まない塚部とその前面に広がる石敷きの平坦部が検出された。これより下位には遺構面は確認できないため、この段階を第1期経塚、つまり築造時の経塚と判断した。範囲確認のため周囲の水田まで広げたトレンチ調査の結果、西側・北側での塚部の裾部分の広がりには確認されなかったが、東側でコンクリートブロックの境から約4m、南側でコンクリートブロックの基礎部分から約6mの辺りまで石が敷かれていることが判明した。

塚部

平面形は、第2期経塚の塚部と同様、西側と北側の裾部を後世に削られているものの、直径約6mの円形をなす。塚の頂部は標高約2m、平坦部からの比高差は約1.1mである。長さ50cmを越えるような、第2期経塚のものとは比べや大きめの石を用いて積み上げるが、規則性は認められず乱雑である。検出中に、銅銭・土師器皿等が出土。

平坦部

第2期経塚の平坦部の下30～50cmで検出。標高は約0.9m。主に径20cm程度の角礫を敷き詰め、平坦部とする。北東区では角礫の上を覆うように径4～5cmの小礫が多数検出された。

また、東側と南側に新たに検出された石敷きの面は、大きく円形を描き、南側で一部突出する。大きめの石の間に小角礫が混じり、平坦部に比べ敷き方は疎である。標高は約0.5m。平坦部とは約40cmの比高差があるが、土層観察の結果、明らかな削平の形跡はなく、この部分にまで平坦部が続く可能性は低い。従って、第1期経塚の平坦部の範囲も、第2期、第3期のものと同じく一辺8m四方の方形部分にあたるものと考えられる。

円形列石（第135図 図版50）

第1期経塚平坦部の石を除去したところ、南端・東端から経塚の中心に向かって直線的に続くと思われた列石は、円形に巡ることが判明した。平坦部で確認された部分は全体の約1/4。列石は、長さ・幅とも50～60cmの大きめの石を接するように並べる。上部に積み上げることなく一段で築き、直径約6.8mの内側の列石の外側に、直径約7.8mの列石が並ぶ。内側と外側の列石の間には溝状に約50cmの隙間があり、その底はオリープ灰色土に達する。混入した角礫を除くと、水平方向に横たわる数本の木材が検出された。切り口に加工の跡が見られるこれらの木材は、列石の下側に入り込むものもあり、軟弱な地盤の上に石を設置する際の補強のために敷かれたものと考えられる。

円形列石の残り3/4は、平坦部の外側の新たに見つかった石敷きの面から検出された。1段積みで

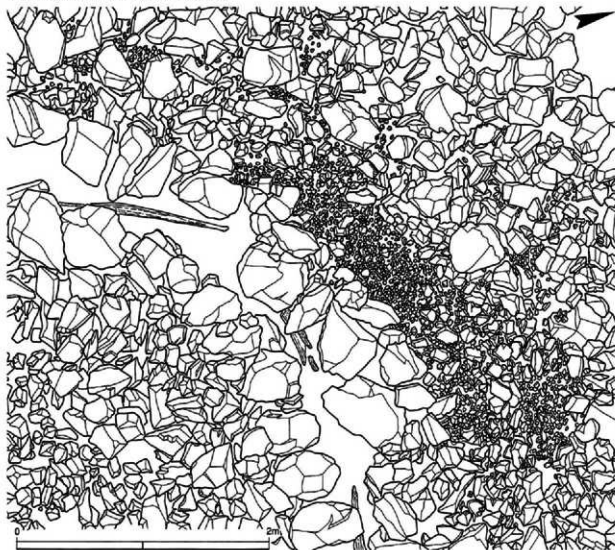
あり、下側からは木材も確認されている。平坦部の列石とは位置的に少し低い、これは下側の暗青灰色の地盤自体が、平坦部中央を最高位にして周囲に向かい緩やかに傾斜しているためと思われる。また、これらの円形列石の東側と南側から杭も3本検出された。残存する長さは約1m、直径10～15cm。木材の先端部を削り尖らせる。用途は不明。

円形列石が本来の経塚であり、中央部あたりに埋納坑の施設がある可能性も考えられることから、列石内の精査を行った。しかし、敷き詰められた石の下には、埋納坑をはじめ経石となり得る石も確認することができなかった。円形列石の性格ははっきりしないが、第1期経塚と同一時期、あるいはそれに先行する可能性もある。

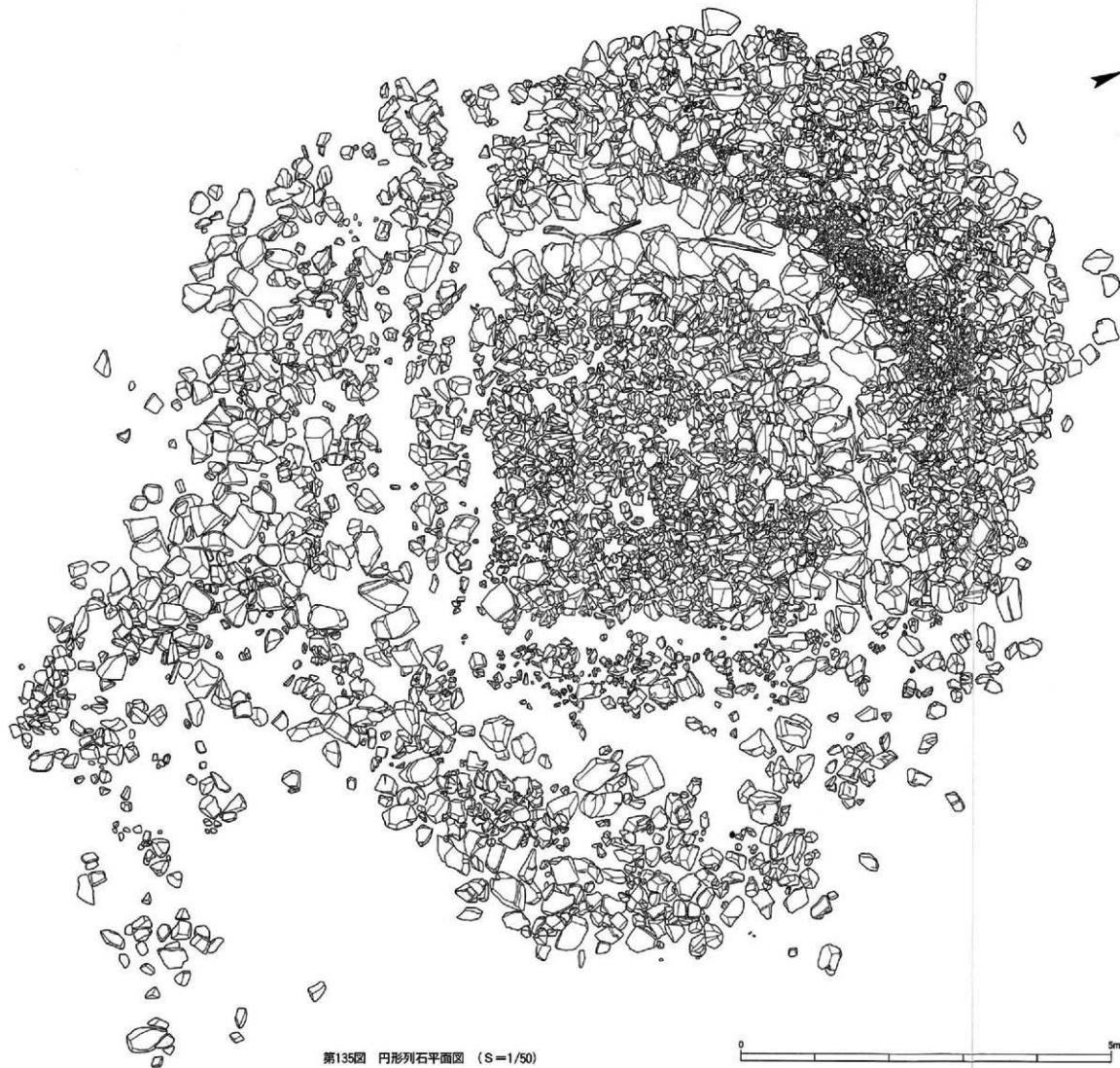
経石出土状況 (第134図 図版50)

塚部の石の除去中、円形列石の外側に沿って、ちょうど塚部の中心部あたりに小礫が集中して検出され始めた。その中に、文字を墨書した石が含まれていたことから経石と判断した。

経石は列石の北西外側、長さ5.5m、幅1.5m、厚さ7～8cmの範囲から出土。埋納坑と思われる施設もなく、経石の間にも大きめの角礫が混じっているため、一見して埋納されたようには思えないが、他の場所からは経石は一切出土してしないことから、築造当初よりこのような状況であったと考えられる。経石とともに土師器皿も出土。



第134図 経石出土状況図 (S=1/30)



第135図 円形列石平面図 (S=1/50)

4. 遺物

経石 (第136図 図版51)

出土した経石の総数は8,258個。その内、文字判読可能なもの13個を含めて墨痕の認められるものは300個余りである。川原石のような円礫も混じってはいるが、大部分は角張った砂岩もしくは凝灰岩製で、大きさも様々である。書写経典は法華経であると思われるが、出土数が極めて少ないため断定はできない。墨書された文字はそれぞれ書体に特徴があり、写経者が複数いたことを示すものである。

1は「一」。台形に近い平面形に比べ厚みが大きい石を用いる。断面形はほぼ長方形。2は「王」。方形の平たい石に書かれた運筆のしっかりした字である。3は「供」。小さな薄い石の凸面に書写する。4は「普」。墨が消えかかり判読しにくい。5は「汝」。なめらかな面に黒々と墨が残る。6は「是」。三角形の平面に合わせ書写している。7は「滅」。出土経石の中でもっとも明確に墨書が残る。8は「有」。縦長の平たい石を用いる。9は「念」。横長に用いた石に合わせて横長に書写する。10は「在」。面の大きさに比べやや小さく書かれる。11は「生」。角張った石の最も広い面に書写する。12は「得」。大きく平たい石を用いる。広い面に合わせて出土経石の中では最も大きく書写されている。13は「脩」。「脩」の旧字体である。縦長の、断面三角形に近い石を用いる。

瓦 (第137図 図版52)

第2期経塚の平坦部及び塚の裾部からコンテナ15箱分もの多量の瓦片を検出した。その多くは破片であるが、完形に近いものも含まれる。平瓦・丸瓦、軒平瓦・軒丸瓦に混じり棧瓦・軒棧瓦も出土。

14・15は巴文軒丸瓦。瓦当直径約14cm。丸く扁平な頭部に比較的長い尾がつく左巻き三ツ巴文の周りの文珠文は12個で、頂部をナデる。瓦当表面は不定方向ナデ。15には一部頸頭圧痕が残る。丸瓦凹面には粘土板を切り取るコビキの際に鉄線を用いた跡(コビキB)が認められる。また、布目痕も残り、15は一部タタキの跡を残す。凸面はヘラ状工具による縦方向のナデ。焼成はともに良好。

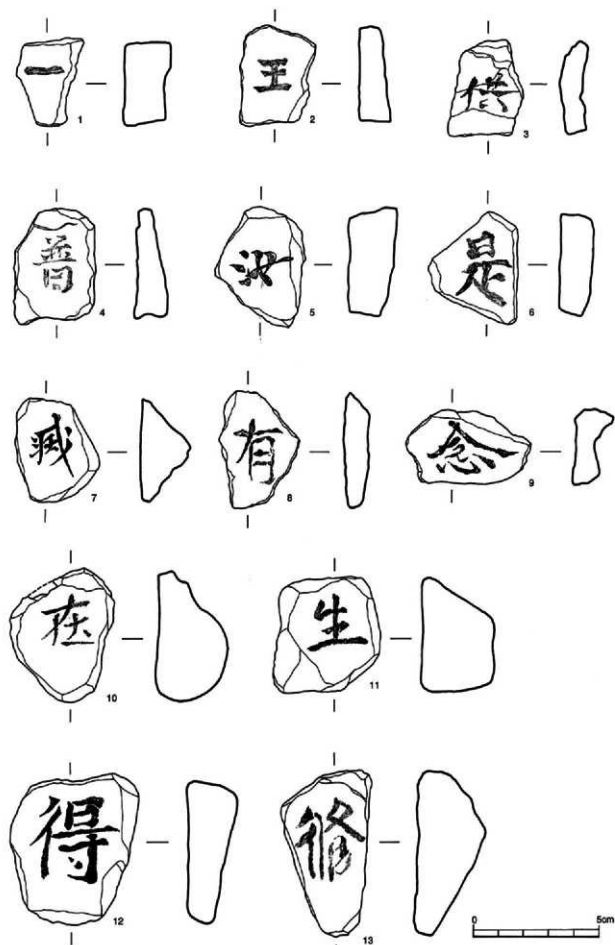
16~18はオニツタを中心飾りとする均整唐草文軒平瓦。16は瓦当部を一部欠くが平瓦部は3/4を残す。平瓦部の全長は26.5cm、幅は中間の所で25.0cmである。凹面はヘラ状工具により縦方向にナデ、一部布目状の痕跡を残し、両側は縦方向のナデと軽い面取りで仕上げる。凸面は瓦当との接合部に粘土を補強し縦方向にナデ、頭部は横ナデで仕上げる。焼成は良好で灰黒色を呈す。17は瓦当部の一部と平瓦部の2/3が欠失。平瓦部と瓦当部との境に充て粘土接合痕が明瞭に残る。凸面は横方向のヘラケズリ後、横方向へのナデによる仕上げか。にぶい黄橙色を呈し、やや軟質。18は瓦当部の3/4を残す。平瓦部の凹面は縦方向のケズリの後、横ナデか。凸面は横ナデ。焼成は良好で、灰黒色を呈す。

19は玉縁付丸瓦。丸瓦部の長さ24.5cm、胴部幅14.5cm、高さ7.0cm、厚さ1.7cm、玉縁長3.2cm。凸面は縦方向のナデ。凹面は布目痕とタタキ痕、コビキBが認められ、四周を面取りしている。

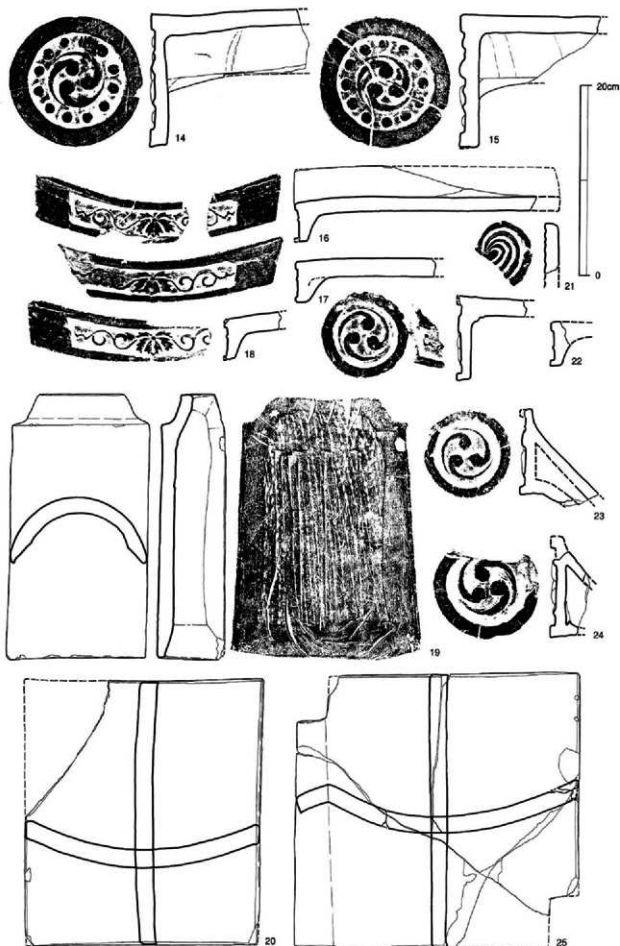
20は平瓦。長さ27.9cm、幅24.8cm、厚さ2.6cmを測る。凹面はヘラ状工具による縦方向にナデ、端部を面取りしている。凸部は横方向のナデを基調とする斜め方向や不定方向のナデ、端面はヘラ切り後ナデを施す。胎土は細砂粒を多く含み、焼成は良好で黒灰色を呈す。

21は鬼瓦の下端部か。表面は摩耗が激しい。胎土は精良、焼成は良好で黒灰色を呈す。

22は軒棧瓦。軒丸部は左巻きの三ツ巴文、軒平部は唐草文が施される。凹面はヘラ状工具による縦方向のナデ、凸面は不定方向のナデで仕上げる。微細粒を多く含み、焼成は良好、灰黒色を呈す。



第136图 出土經石实测图 (S=2/3)



第137图 瓦拓影·实测图 (S=1/40)

23・24は鳥爨。23の瓦当直径は9.0cm。左巻きの三ツ巴文は円形の頭部に稜線を持つ胴部・尾部が続く。胎土は精良、やや軟質で灰褐色を呈す。24の瓦当直径は11.0cm。三ツ巴文は右巻き、頭部は円形で内側をナダあげ、やや太めの胴部と、短めの尾部がつく。瓦当表面には筒接合時のヘラキザミ痕が残る。胎土には微細粒を多く含み、やや軟質で灰黒色を呈す。

25は棧瓦。前・後端部を一部欠くが、全長28.7cm、全幅29.8cm、前切込み約5.0cm、後切込み約4.8cm。後辺26.4cm、前辺26.7cm。凹面は縦方向に凸面は横方向にナダる。側面はヘラ切り後ナダを行う。

土器・鉄製品・石製品・銭 (第138図 図版52)

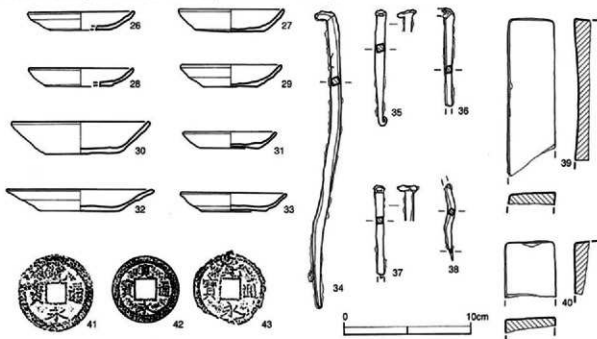
積石の検出中、多数の土師器皿片や鉄釘・砥石・銅銭などが出土した。土師器皿・銅銭は主に塚部の石の間から出土し、中には置かれた形で検出された皿もある。また、鉄釘は第2面の瓦とともに出土した。

26～33は土師器皿。26は第1期経塚平坦部で検出。口径8.2cm、底径4.6cm、器高1.4cm。内外面とも浅黄橙色を呈す。27～30は第1期経塚の塚部検出時に出土。27～29は、口径7.8～8.3cm、底径4.0～5.5cm、器高1.5～1.7cmであるのに比べ、30は、それぞれ10.6cm・5.5cm・2.5cmと大型である。これらは内外面ともにぶい橙色を呈し、27は口縁部に灯明の芯の痕跡が残り、30の内面には一部すが付着する。31は祭壇状積石部で検出。口径7.2cm、底径4.6cm、器高1.3cm。丁寧にナダを施された器面はぶい橙色を呈す。32は東トレンチより出土。口径11.4cm、底径6.0cm、器高1.7cm。体部は緩く立ち上がり口縁部は外反する。内外面ともにぶい橙色。33は経塚除去後に検出。口径8.2cm、底径5.1cm、器高1.5cm。素地はぶい橙色であるが、内外面ともすが付着し暗褐色を呈す。

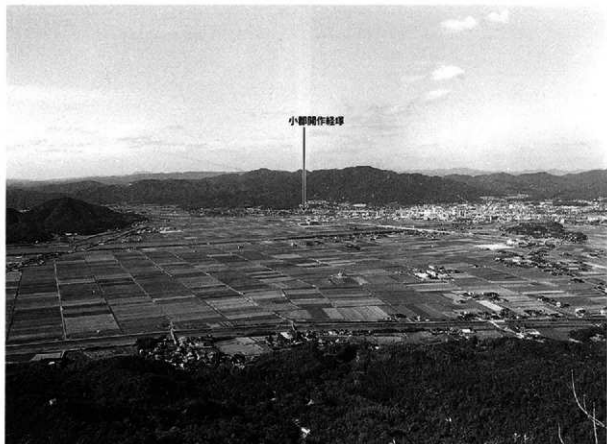
34～38は鉄釘。いずれの体部も方形の断面をもつ。頭部は叩きつぶして折り曲げる。34は長さ約24cmの大型のもので、幅・厚さは0.6～0.7cm。35は長さ約9cmと短く、先端部は丸く弧を描く。36～38はそれぞれ先端部、頭部を欠損するが、扁平な頭部、くさび形先端部が残る。

39・40は砥石。ともに剝離した面の反対側のみを使用。側面は丁寧に整形されている。砂岩製か。

41～43は寛永通宝。41は第1期、42は第2期の経塚塚部より出土。直径、厚さはそれぞれ、41は2.6cm・0.1cm、42は2.3cm・0.09cm、43は2.6cm・0.1cm。



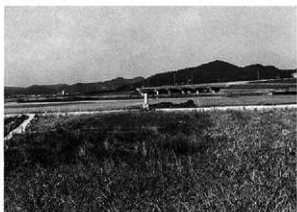
第138図 出土土器・鉄製品・石製品実測図および銭拓影 (S=1/3、銭拓影はS=4/5)



小郡開作経塚を火の山から望む



経塚近景(南西から)



経塚近景(東から)



第3期経塚(東から)



安全祈願祭



経塔東面(奉納大栗妙典塚)



経塔南面



第2期経塚(東から)



第2期経塚積石部



東側瓦敷面検出状況



北西隅瓦敷面検出状況



祭壇状積石(東から)



祭壇状積石



土師器皿検出状況



銅銭検出状況



調査区拡張



第1期経塚(東から)



第1期経塚(南から)



写真測量風景



円形列石出土状況(南西から)



円形列石出土状況(東から)



経石出土状況



経石検出作業風景



土師器皿出土状況



杭検出状況



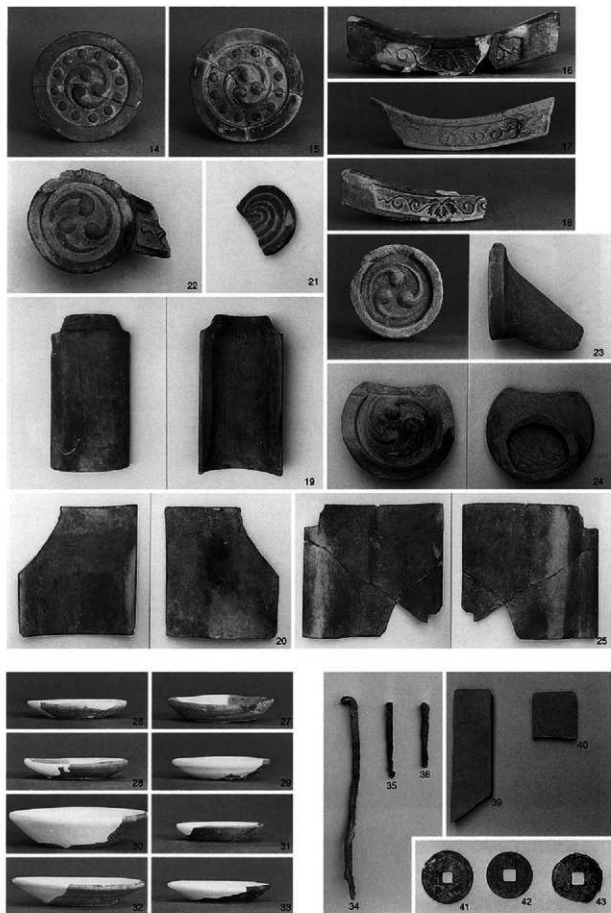
木片検出状況



最終トレンチ完掘状況



出土經石



出土遺物

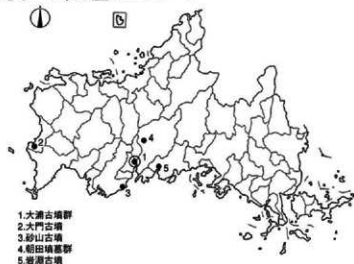
第4章 まとめ

第1節 古墳群について

1. 大浦古墳群の竪穴系横口式石室について

竪穴系横口式石室の形態の特徴やその形式分類にはこれまでに諸説がみられるが、本稿では、柳沢一男氏の説に即して若干ふれておきたい。

当古墳群の竪穴系横口式石室は、同氏の分類から横口部に注目すると、横口部に板石を立て袖部とし、その上部に楣石、下部には椀石を配した最も横口部が整った時期であり、石室には基部石として腰石を用いたⅢB期に属する。



第139図 竪穴系横口式石室の分布

その観点からみると、当古墳群では調査を行った12基中7基が竪穴系横口式石室ということになる。さらに調査区周辺にも、同様の形態と思われる石室が見られ、当古墳群全体では、さらに基数が増えることは確実である。その点から、山口県内の竪穴系横口式石室の分布のあり方を見てみると、現時点では、当古墳群にとりわけ集中していることが注目される。

このことは、当古墳群を築造した集団が、山口県内の他の地域とは若干様相を異にし、あるいは婚姻関係等によって他地域とのより強い関係を有した集団である可能性を強く示唆しているといえよう。その場合、さらに詳細な資料の検討が必要であるが、少なくとも、当古墳群は、その石室及び出土土器の形態と特徴などからみて、北部九州、特に宗像から遠賀川流域一帯の地域からの影響を強く受けている可能性が強いものとみられる。

当古墳群の竪穴系横口式石室の築造時期は、他の形態の古墳に先行し、その出土土器からみて、そのほとんどが、若干の時期差はあるものの6世紀前半代に継起的に築造されている。そのほとんどの古墳には、追葬の痕跡が認められ、多くが6世紀後半にまで継続したとみられる。これらの古墳には、玄室内から土器が出土せず、石室外から大量の土器が出土したことなど共通する点が多い。しかし、それぞれの古墳には、その形態に特徴があり、いくつかのパターンに分類することができる。

第53表 浦辺古墳群・大浦古墳群・梅ヶ崎古墳群出土土器編年表

古墳群	浦辺	大浦												梅ヶ崎				
		1号	1号	2号	3号	4号	5号	6号	7号	8号	9号	10号	11号	12号	1号	2号	3号	5号
400																		
500	I																	
	II																	
	III																	
	IV																	
600	V																	
	VI																	
	VII																	
700																		
竪穴系横口		○	○	○					○		○	○	○				○	
石室外祭祀		○	○	○	○				○	○	○	○	○				○	

まず、墓道の形状から、大きく下記の2類に分けることができる。

I類 玄門及び前庭部から続く墓道が傾斜を持つもの。

II類 玄門からはほぼ水平、若しくは、下降しながら長い墓道が続くもの。

さらに、傾斜の角度の違いと石室形態の違いからI類が、abの2つに分類される。

a 傾斜角度が20°を超え、玄門幅が50cm以下で、玄室の床面積が3.5㎡以下のもの。

b 傾斜角度が20°を超えず、玄門幅が50cm以上で、玄室の床面積が3.5㎡以上のもの。

I-a類に属する古墳は、2・7号墳である。石室の床面積が3.1~3.3㎡で、玄門幅も45cm前後と狭い。横口部から接続する墓道は2・7号墳で差違があり、2号墳は狭い前庭部より28°の角度で、斜め上方へ墓道が向かっているのに対して、7号墳は若干広めの前庭部より、55°の角度を持って上方に向かっている。厳密には、2・7号墳は、別の類とすべきかもしれないが、ここでは1つの形態にまとめておきたい。

I-b類に属する古墳は、1・3・10号墳である。石室の床面積が4.3~4.8㎡前後で、玄門幅も50cmを超え、他の横穴式石室と比較しても遜色がない。また、玄室と前庭部の床面には若干の段差があり、前庭部から斜め上方に向かう短い墓道が接続する。その角度は、1号墳で10°、3号墳で17°、10号墳で18°を測る。

II類に属する古墳は、9・11号墳である。この形態の墓道は、他の地域ではあまり見られず、横穴式石室のアイデアの導入によって、この地域独自に形成された可能性が高い。

また、すべての古墳は、腰石に板石を用いており、その祖形が石棺系石室であることは、ほぼ間違いないであろう。特に、I-aに属する古墳は、その形態を強く残しており、玄門の幅と墓道の角度からみれば、横口部未使用の可能性もある。

次に、それらの古墳の分布状況を観察すると、II類に属する古墳以外はその開口方向に統一性がないことがわかる。そのことは言い換えれば、地形的制約を無視して、同形態の古墳を意図的に築造していることとなる。さらに、同一丘陵上に継起的に諸々な形態の竪穴系横口式石室が成立していることは、後述して築造される他の形態の古墳を含め、当古墳群の造墓集団の中に、有力家父長層を中心とした固有の墓域の概念がすでに成立していたものと考えられよう。

第54表 大浦古墳群・梅ヶ崎古墳群供献土器分類表

供献土器		須恵器							土師器		その他	
		器台	壺か壺	坏	高坏	提瓶	短頸壺	甌	鉢	高坏		壺
大浦	1号			○	○		○	○		○	○	馬具
	2号		○	○	○		○	○				
	3号	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	4号		○	○	○		○					
	8号											
	9号		○	○	○	○	○	○		○		
	10号		○	○	○	○	○	○				
	11号			○					○			
	12号		○		○	○				○		
	13号		○							○		
梅ヶ崎	2号									○	土師器脚付壺	
	3号	○	○		○					○		

2. 大浦古墳群・梅ヶ崎古墳群の石室外祭祀儀礼について

両古墳群とも、石室外に明らかに祭祀儀礼の痕跡と思われる土器群が出土した古墳がある。

それら土器群の出土状況については、各古墳の項を参照していただくとし、本稿では、その出土した器種の特徴と、併せて出土したその他の遺物について若干ふれておきたい。

第54表に掲げる器種を大まかに分類すると、器台、壺、甕、短頸壺などの容器類、坏、高坏などの盛具類、提瓶、甕などの飲用具類に分けられる。それらは全て飲食具であり、当時の墳丘祭祀に用いられた土器の器種構成のあり方等をうかがわせるものとして注目される。

それらの組み合わせを見ると、容器類、盛具類、飲用具類が全て出土した古墳（大浦1・2・3・4・9・10・12号墳）と、容器類、盛具類が出土した古墳（梅ヶ崎3号墳）と、盛具類のみが出土した古墳（大浦8・11号墳、梅ヶ崎2号墳）との3種類に分けられる。後世に損壊を受けた古墳がほとんどであるため、こうしたあり方が当時の状況をそのまま反映しているとはいきれないものの、墳丘祭祀の実態の一面を示唆するものとして注目しておきたい。

供献のあり方には、大浦古墳群1号墳のように、高坏の上に馬具を置き供献された例や、4号墳のように土器と紡錘車が同伴して供献された例など、本来、玄室内に副葬されるべき遺物が、石室外に供献されている特異な例などが見られた。通常、飲食具供献が現世との絆を断つものと解釈すれば、そのような石室外での供献は何を意味するものであろうか。こうした祭祀の実態の解明には、さらに類例の蓄積が必要であろう。

いずれにしても、当古墳群においては、石室内に副葬された土器類等はきわめて少なく、墓道や墳丘祭祀に伴う供献土器等の出土量がとりわけ顕著である。これらは主として各追葬時における祭祀行為の累積の結果を示すものとみてよいであろうが、県内におけるこれまでの調査例の中では突出したあり方を呈している。こうした石室外祭祀のあり方が、当古墳群に固有の葬送儀礼であるとするならば、ここで改めて他域との深い関連を考慮する必要があるであろう。今後、石室外祭祀儀礼のさらなる調査の進展と分析検討に期待したい。

大浦の丘陵より、東に目を転じると、一面、水田地帯が広がる。これらの水田地帯は古墳時代には、深く入り組んだ天然の良港であったと思われる。これらの古墳を築造した人々の経済的基盤としては、農業依存の可能性は低く、やはり、瀬戸内と内陸を結ぶ交通の要衝としての地の利を活かした制海権の掌握をその根拠としたものであろう。

最後に、調査に協力していただいた地元の方々、関係諸機関、御指導いただいた各位に感謝の意を表してまとめたい。

(豊島)

(参考文献)

- 柳沢一男「堅穴系横口式石室再考」（『森貞次郎博士古希記念 古文化論集』下巻 森貞次郎博士古希記念論文集刊行会 1982）
山崎信二『横穴式石室構造の地域別比較研究 中・西国編』1985
伊達宗泰「古墳墳丘上祭祀の問題」（『榎原考古学研究所論集』第六 吉川弘文館 1984）

第2節 小郡開作経塚について

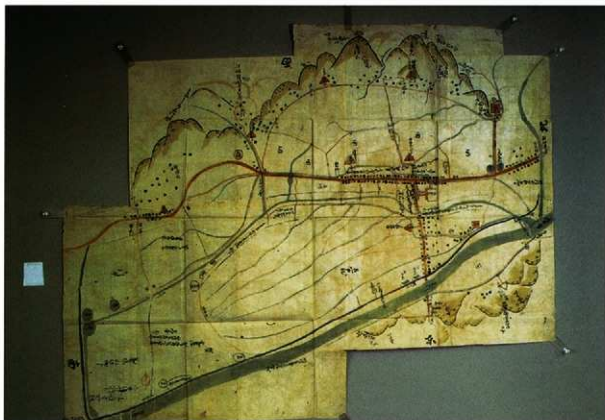
「書写した経典を土中に埋納する」という経塚の歴史は10世紀の後半より始まるが、近世になると銅製経筒に紙本経を納め埋納する例は極めてまれで、埋納経典は、小さな川原石などに経文を書写した礫石経が大半を占めるようになる。この時期の経塚の県内での調査例としては、元禄年間（17世紀末～18世紀初頭）に造営された「東隆寺一字一石経塚」（一字一石経塚、宇部市）、享保17（1732）年に造営を発念された「山光寺経塚」（多字一石経塚、油谷町）、天保10（1839）年に発願された「浅井経塚」（一字一石経塚、油谷町）が知られる。

「小郡町史」（昭和8年版）には、今回調査した経塚に関する記載として「経塚」の項を立てて次のように述べている。

「傳説によれば、昔東條九郎右衛門が開作を築立て巡視の時に、馬上より海中に向つて『龍宮でも如何もなるまい』と放言したるにより、其の後此所が決潰して馬の死することが多かつた。これにより、妙湛寺を頼み一字一石の法華經を埋めたるを以て、経塚と名付けた。かくて此所に小堂を設け、開作鎮護の修法を營むことが起つた。始めは、塚本に若干の御免地ありて、其の作態を以て、毎春妙湛寺より法華經一部を讀誦して供養の資に充てしが、寛保前に御免地を召上げられた。以後は柏崎の地下貫ぎを以て供養し、妙湛寺に參詣する慣例となつた。同寺廢せられし後は、地下に於いて祭られた。」（傍点 引用者）

これらの記述をふまえた上で今回の発掘調査で明らかになったことを次に述べ、まとめとしたい。

築造時期 標石に記されている年号は「寛文二年壬寅」、西暦1662年であり、東條九郎右衛門が小郡宰判の代官を勤めたのは慶安元（1648）年から寛文6（1666）年である。東條九郎右衛門は慶三開作や鑄銭司の長沢池の開発などをはじめ、寛永19（1642）年から万治2（1659）年までの間に、小郡・嘉川・白松・陶・鑄銭司・秋徳の各村で合計4,319石余に相当する開作及びそれに伴う堤（溜池）・



「小郡下郷地下図」（享保13年頃 山口県立文書館所蔵）

井手の築造を行い、地域の功勞者として広く知られている。古開作が完成するのが1670年頃であることから、この時期に古開作の南端に、開作地の安全を祈願して経塚を造った可能性が強い。そして、新開作である元禄開作は、北端に経塚があったからこそ、別名「経塚開作」と呼ばれるようになったのであろう。東條九郎右衛門が直接築造に関わったかどうかはともかく、経塚の築造された時期は、寛文2年と考えてよいものと思われる。

小堂 「経塚堂 御開作中二有 但由緒之儀ハ妙湛寺より申出相成候事」（「防長地下上申」）という記述がある。「堂」と記すからには建築物のあったことが伺える。今回出土した多量の瓦片は、ここに瓦葺きの建物があつたことを示す。経塚自体がそれほど広い範囲でないことから、まさに小堂である。平瓦、丸瓦に混じって棧瓦が検出されたが、棧瓦は延宝2（1674）年に考案され、以来、各地に急速に瓦葺きの建物が増えていくことになる。経塚においても、築造時には丸瓦・平瓦等を使用した本瓦葺きの建物であった可能性があるが、棧瓦の普及に伴って初期の修築・再建に際して棧瓦が順次用いられていったものとみられる。

風水害 記録によれば、「延宝二（1674）年八月十七日 大風洪水あり」「元禄四（1691）年 五月二十七日～六月四日 大洪水」「元禄六（1693）年 大風雨の襲来」とあり、開作地はたびたび風水害に見舞われている。また、天保11（1840）年の大洪水の時は、小郡開作全体が水没し、開作中の水深は平均にして九尺（約270cm）あつたとされる。経塚はそれらの水害時に何度も水没し、時には破壊され、土砂の下に埋没したことであろうが、そのたびに人々は経塚の再建を図った。大別して第1期から第3期に渡る各経塚の姿は当時の人々の信仰心の表れであり、それらの間に今に残される土砂・小礫の堆積の層は、人々の恐れた自然の脅威を如実に物語るものである。

経石 礫石経に書写される経典が法華経の場合、「法華経三部経」は総文字数82,681字、「妙法蓮華経」で69,384字であり、経塚からは6万から8万点の経石が出土する。事実、前出の「東隆寺一字一石経塚」では67,975個、「浅井経塚」では71,747個、多字一石経塚である「山光寺経塚」では826個の、川原石などの扁平な円礫に経文が墨書されている経石が出土している。それらは平面形が円形もしくは方形の、深さ1m程度の素掘りあるいは石組みの土坑を埋納坑とし、その上部に方形の基壇が組まれ経塔が据えられるという構造を持つ。

それらの経塚に比べて、今回調査された小郡開作経塚では出土経石の数は8,258個と極端に少ない。埋納坑も存在せず、明らかに従前の三例の埋納方法とは異なる。洪水により、一度破壊を受けた結果とも考えられるが、経石に用いられる石のほとんどが川原石のような円礫でなく、入手しやすいと思われる様々な大きさの角礫であることから、築造当初より少ない経石を非常に簡略化した施設に納めるという埋納方法が採られた可能性が高い。

（参考文献）	能美宗一	『小郡町史』	1933
	嘉川郷土史編纂特別委員会	『郷土史 ふるさと嘉川』	1994
	宇部市教育委員会	『東隆寺一字一石経塚』	1988
	油谷町教育委員会	『山光寺経塚』	1993
	油谷町教育委員会	『浅井経塚』	1991
	関 秀夫	『経塚 ニュー・サイエンス社』	1985

報告書抄録

ふりがな	うらべこふんぐん おおうらこふんぐん うめがさきこふんぐん おごおりかいさくきょうづか
書名	浦辺古墳群 大浦古墳群 梅ヶ崎古墳群 小郡開作経塚
副書名	一般県道山口阿知須字部線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第1集
編集著者名	豊島正行 山本義信 大村秀典 奥原栄一郎 安部康史
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3-22 TEL 0839-23-1060
発行年月日	西暦1998年3月20日(平成10年3月20日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
浦辺古墳群	山口県山口市 大字嘉川	35203		34° 3' 44"	131° 23' 53"	960416～ 970325	1,500	一般県道山口阿知須字部線緊急地方道路整備事業に伴う事前調査
大浦古墳群	山口県山口市 大字江崎	35203		34° 3' 12"	131° 23' 50"	960416～ 970325 970416～ 980325	4,450	
梅ヶ崎古墳群	山口県山口市 大字江崎	35203		34° 2' 43"	131° 23' 36"	970416～ 980325	1,650	
小郡開作経塚	山口県吉敷郡 小郡町大字下郷	35402		34° 4' 45"	131° 23' 56"	970416～ 980325	245	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
浦辺古墳群	埋葬跡	古墳	円墳3基	須恵器 土師器 鉄製品 装身具	北部九州系の壜穴系横口式石室構造の古墳が7基、複室の横穴式石室構造の古墳が2基見つけた。
大浦古墳群	埋葬跡	古墳	円墳12基	須恵器 土師器 鉄製品 装身具	
梅ヶ崎古墳群	埋葬跡	古墳	円墳5基	須恵器 土師器 鉄製品 装身具	
小郡開作経塚	その他	近世	一字一石経塚	経石 瓦 銅銭 土師器皿	

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第1集

浦辺古墳群
大浦古墳群
梅ヶ崎古墳群
小郡開作経塚

一般県道山口阿知須宇部線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告

1998

編集 財団法人 山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター
(山口市春日町3-22)

発行 財団法人 山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター
(山口市春日町3-22)

印刷 泉菊印刷株式会社
(下関市長府町8-48)
